

神緑会ニュースレター

第2巻 第3号・4号(合併号)
発行日 2011年3月5日



目次	ページ
・ 社団法人神緑会 平成22年度臨時総会報告並びに平成23年新春学術講演会報告	2
大阪府・兵庫県両医師会長就任挨拶	7
新春学術講演 「日本の医療・社会秩序が混乱している理由」 講演者 菊池 英博氏	8
懇親会報告	11
・ iPS細胞研究基金のご紹介	12
・ 活躍している先輩シリーズ2	13
学内の動き	
念願の保育所の完成間近！	27
「地域医療学Ⅰ」を開講しました！	29
研究B棟（旧基礎北棟）内に学生用講義室が完成	30
・ 緊急のお知らせ！	31

社団法人神緑会 平成22年度臨時総会並びに平成23年新春学術講演会報告

今年のような厳寒の日が続く中でも、特に寒いとの予報で参加者の確保に不安な気持ちで当日を迎えました。幸いにも、寒いだけの日で、時折太陽も顔をみせる天候でした。降りしきる雪でJRの全面運休や高速道路の封鎖のみられた北陸の人々のご苦労には申し訳なく感じながらも安堵しました。多数の議事案件と大阪府・兵庫県の医師会長の挨拶、特別講演を予定したため、土曜日に診療をされていた先生方には、申し訳ありませんでしたが、午後2時から総会となりました。会場のANAクラウンプラザホテルは、新神戸オリエンタルホテルとして、永年親しまれた新神戸駅前の鉛筆型のモダンなホテルです。神緑会が使用するのは、初めてと思われます。



物故会員リストを読み上げる前田 盛理事長

物故者35名（別紙1）の黙祷の後、総会の審議に入りました。平成20年12月からの法人法の施行に伴い、3年越しで検討して、昨年6月総会が審議等の最後とと思っていましたが、内閣府の公益認定等委員会の審議に於いて、定款で8カ所、会員規則で1カ所の補正の指導がありました。業務委託している百合岡事務所の弁では、「事前に兵庫県の公益法人室のチェックを受けており、内閣府での審査には安心していたのですが、何とも申し訳ない限りです。ほとんどが実質的な修正点でなく、内閣府令などに基づく修正がほとんどですが、整合性を求めるものです」と大変残念がっておられました。紙面の関係で詳細

は省きますが、主なものとして、定款第20条の<決議>では、会議の成立要件として総正会員の**3分の1以上**の出席は、**過半数**の出席に訂正させられました。この場合の出席者数には委任状が有効ではありますが、一般社団法人移行後も定款の修正には、引き続き厳しいハードルとなりました。なお、一般社団法人への移行には、登記希望日が認められる事になり、平成23年4月1日に移行する予定です。

他の、審議事項では、恵美委員長から慶祝規定内規の訂正が提案され、委員会提案通りに承認されました。田中学術委員会委員長提案の23年度事業計画（別紙2）と大洞経理委員会委員長提案の収支予算案も総て例年通りの承認が得られました。3年毎に地域貢献として行う事業は、3事業が新しくなり、神緑会では初めてですが斎藤先生分は継続が認められました。

新任教授と栄誉者紹介（別紙3）

新任教授では、異動も含めて16名の多くに達しました。栄誉者も22名と多く両方の出席者には、会場でご挨拶を賜りました。一部は、時間の関係もあり、懇親会でのご挨拶となりました。なお、このリストは、ご本人や周辺の方々のご連絡に依拠しており、事務局では把握困難な場合がございます。神戸大学医学部総務課人事係には、神戸大学分の着任時に神緑会事務局へ連絡していただきますようお願いしました。リストに漏れている方はご遠慮なくご連絡下さい。

別紙1

平成22年 物故会員

平成20年2月6日	中野一弘 (30)	4月2日	長谷川 護 (37)	6月20日	辻 俊博 (43)
平成21年11月12日	岸谷幹夫 (31)	4月19日	櫻井 隆 (40)	6月21日	橋本利彦 (28)
平成21年12月9日	金原宏之 (30)	4月23日	神田裕史 (57)	6月?日	信岡麟次郎 (25)
平成22年1月11日	村松 暁 (38)	4月29日	宮崎一郎 (28)	7月13日	本山新三 (28)
1月16日	北岡 修 (32)	5月1日	本條喜紀 (43)	7月27日	瀬藤英嗣 (40)
1月16日	室井凱雄 (39)	5月6日	上中 宏 (46)	9月3日	増田良一 (33)
1月18日	小林精吉 (33)	5月7日	多久文男 (賛助)	9月15日	永田典昭 (29)
1月24日	赤井千郷 (30)	5月15日	萩野昭郎 (25)	9月28日	南 裕也 (03)
2月6日	山中陽一 (27)	5月20日	和田収平 (39)	10月19日	小野俊之 (46)
3月10日	清重欽二 (36)	5月25日	小笠原 寛 (47)	11月1日	藤定英夫 (55)
3月11日	三浦三郎 (25)	6月5日	西崎敬四郎 (33)	12月5日	中後 勝 (31)
3月27日	羽間弘知 (26)	6月13日	富岡雅夫 (61)		

別紙2

平成23年度 社団法人神緑会 事業計画書

- 1) 地域における疾病並びに医療等に関する研究調査(定款第5条第1号該当事業) (予算総額 1,600,000 円)
 - (1) 糖尿病発症におけるインクレチン効果の疫学的研究 予算 400,000円
研究調査班代表者：愛仁会千船病院 代謝内分泌内科部長 田守 義和
研究協力者：村上 淳(愛仁会総合健康センター)、林 朝茂(大阪市立大学都市環境医学)
 - (2) 周産期予後不良症例の背景解析についての調査研究 予算 400,000円
研究調査班代表者：神戸大学大学院医学研究科 総合臨床教育・育成学特命教授 山崎 峰夫
研究協力者：大橋 正伸(若宮病院)、房 正規(加古川市民病院)、船越 徹(兵庫県立こども病院)、
左右田 裕生(済生会兵庫県病院)、西島 光浩(兵庫県立淡路病院)
 - (3) 大災害時死亡者の家族に対する支援システムの構築 予算 400,000円
研究調査班代表者：兵庫医科大学 救命救急センター副センター長 久保山 一敏
研究協力者：石井 昇(神戸大学大学院医学研究科)、小澤 修一(兵庫県災害医療センター)、
小谷 穰治(兵庫医科大学)、中尾 博之(神戸大学医学部附属病院)、
中山 伸一(兵庫県災害医療センター)、村上 典子(神戸赤十字病院)、
吉永 和正(兵庫医科大学)
 - (4) 我国および周辺アジア諸国におけるヒトバベシア症発生状況調査と地域特有 予算 400,000円
バベシア原虫の性状の比較解析
研究調査班代表者：兵庫医療大学 薬学部微生物学分野 齋藤 あつ子
研究協力機関：神戸大学大学院医学研究科微生物学分野、兵庫県立淡路病院、洲本伊月病院、ほか
- 2) 学術講演会等の開催 (定款第5条第2号該当事業) (予算総額 1,500,000 円)
- 3) 教育研究・学術交流援助 (定款第5条第3号該当事業) (予算総額 2,300,000 円)
 - (1) 本会学術委員会の答申に基づき援助対象の医学に関する学術交流基準又は教育・研究活動基準に合致するものの選考を行い、該当者に対し、原則として1件につき500,000円を限度として援助を行う。 予算 1,900,000円
 - (2) 本会学術委員会の答申に基づき援助対象の海外における学会発表基準に合致するものの選考を行い、該当者に対し、原則として1件につき100,000円を限度として援助を行う。 予算 100,000 円
 - (3) 本会学術委員会の答申に基づき、援助対象となる女性の研究者の中から、別に定める学術奨励賞規定により1名の選考を行い、該当者に対して300,000円を授与する。 予算 300,000 円
- 4) 学術誌の発行 (定款第5条第4号該当事業) (予算総額 2,700,000 円)

内容については学術誌編集委員会で検討し、充実したものにする。

- 5) 医学部教員の海外学習に対する援助（定款第5条第5号該当事業）（予算総額 500,000 円）
 6) 医学部学生の海外交流学习に対する援助（定款第5条第5号該当事業）（予算総額 1,000,000 円）

平成23年度事業費総額 合計 9,600,000 円

別紙3

新任教授並びに榮譽者一覧

【新任教授】

兵庫県立大学大学院経営研究科 教授	後藤 武 (43)
兵庫県立大学大学院経営研究科 教授	志田 力 (48)
東京医療保健大学医療栄養学科 教授	高柳 和江 (45)
神戸学院大学総合リハビリテーション学部 教授	前田 潔 (46)
慈慶医療科学大学院大学 医療安全管理学 医療セイフティマネジメント学分野 教授	江原 一雅 (50)
甲子園大学栄養学部 教授	河本 英作 (50)
京都大学大学院薬学研究科最先端創薬研究センター 教授	松本 明 (53)
神戸女子大学家政学部管理栄養士養成課程 教授	置村 康彦 (55)
大阪医科大学放射線科 教授	猪俣 泰典 (55)
神戸大学大学院医学研究科生化学・分子生物学講座シグナル統合学 教授	的崎 尚 (56)
愛媛大学大学院医学系研究科分子病理学分野 教授	北澤 莊平 (60)
神戸大学大学院医学研究科こども急性疾患学 特命教授	竹島 泰宏 (61)
近畿大学医学部病理学講座 教授	伊藤 彰彦 (63)
関西学院大学文学部総合心理科学科 教授	小野 久江 (02)
獨協医科大学 PET センター 教授	坂本 攝 (04)
京都大学 iPS 細胞研究所 教授	青井 貴之 (10)
神戸大学大学院医学研究科地域医療ネットワーク学 特命教授	藤田 剛 (特別)

注) () 内は卒業年次、特別は特別会員

【人事異動並びに榮譽者】

神戸大学大学院 保健学研究科長	塩澤 俊一 (50)
兵庫県教育委員長	西村 亮一 (38)
兵庫県医師会 会長	川島 龍一 (44)
大阪府医師会 会長	伯井 俊明 (44)
公立神崎総合病院 院長	打村 昌一 (46)
国立病院機構神戸医療センター 院長	由宇 芳才 (46)
加古川市民病院 院長	石川 雄一 (47)
福井県立病院 院長	山本信一郎 (49)
大阪府済生会中津病院 院長	川嶋成乃亮 (52)
兵庫県洲本市医師会 会長	滝川 卓 (55)
兵庫県粒子線医療センター 院長	村上 昌雄 (57)
瑞宝双光章	多木 喬郎 (25)
瑞宝小綬章	小川 恭一 (35)

瑞宝双光章
瑞宝小綬章
兵庫県健康功労賞
兵庫県健康功労賞
兵庫県健康功労賞
兵庫県健康功労賞
京都賞、学士院賞、恩賜賞、バルザン賞、京都市民荣誉賞、文化功労者
兵庫県高齢者特別賞
兵庫県高齢者特別賞

石川 和夫 (37)
光辻 烈馬 (40)
神澤 正三 (41)
渡邊 彌生 (43)
中治 隆宏 (44)
宮崎 隆吉 (47)
山中 伸弥 (62)
河崎与一郎 (賛助)
柴田 正樹 (賛助)

総会に出席された新任教授・荣誉者

新任教授



高柳 和江
(昭和 45 年卒)



江原 一雅
(昭和 50 年卒)



松本 明
(昭和 53 年卒)



猪俣 泰典
(昭和 55 年卒)



的崎 尚
(昭和 56 年卒)



伊藤 彰彦
(昭和 63 年卒)



坂本 攝
(平成 4 年卒)



青井 貴之
(平成 10 年卒)



藤田 剛
(特別会員)

病院長就任



打村 昌一 (昭和 46 年卒)



由宇 芳才 (昭和 46 年卒)



山本信一郎 (昭和 49 年卒)



川嶋 成乃亮 (昭和 52 年卒)



村上 昌雄 (昭和 57 年卒)

栄誉者



小川 恭一 (昭和 35 年卒)



柴田 正樹 (賛助会員)

大阪府・兵庫県両医師会長就任挨拶

大阪府の人口は880万人、兵庫県の人口は560万人と両府県とも大きな規模の医師会です。その両医師会の会長に平成22年4月から神緑会員である伯井俊明先生と川島龍一先生が就任されました。府県レベルの医師会長に選ばれることはただでさえ大変と思われませんが、しかも同時期に神緑会員が占めることは更に困難であり、神緑会会員一同は、そのご努力に敬意を表すると同時に喜び致します。そう言う点でも、是非両会長を早くお招きして、会長としての思いや方針などをお聞かせいただきたいとのご意見が会員諸氏から寄せられていました。同時に、この機会に「医師会と神緑会活動との連携など」に十分な時間を割いて対応すべきと思われましたが、特別講演などとの時間配分から両医師会長に御了解をいただいた上でそれぞれ20分ずつご発言いただくこととしました。

発言要旨（時間的に急ぐため、あくまでもメモ書きからの原稿です。雰囲気伝わればとの趣旨ですので細部での間違いがあれば申し訳ありません：編集委員会）



伯井 俊明（昭和44年卒） 大阪府医師会長就任挨拶

大阪では、過去、ほとんど特定の大学出身者しか会長に選ばれてなかったし、選挙になること自体が20数年ぶりと言われました。そう言う点でも神緑会会員のご協力に感謝したい。2年前に一票差でしかもその一票が正規の投票用紙でなかったが、負けは負けと思った。日本医師会や近畿の会合でも川島会長と一緒にいるが、学生時代に剣道部でも一緒に、理念や主義、主張もほぼ同じなので非常にやり易い。2つの医師会で連携しながら、日本医師会をリードしていきたい。新年早々に読んだ本に、「葉を欠いて根を絶つ」との言葉があった。昨年一年間は、日本の政治が枝葉にこだわりすぎて、根を枯らす状態をもたらした。昨年の臨時国会では、厚生労働省が提出した法案は一つも通らなかった。小沢問題や中国船の問題で混迷したが、一般国民の生活の視点で政治をやってほしい。診療報酬改定では、0.19%のプラス改定でしたが、更に地域医療の崩壊を止める方向性をしっかりと示してほしい。医師は目の前の患者さんを助けるし、患者や

国民の声を伝えて社会基盤を守りたい。菅民主党政権が第三の道として強い社会保障を提案しているのは歓迎する。医療を金儲けの対象にしてはいけないのであって、混合診療等への動きがあるので危機感を持って責務を果たしたい。原中日本医師会会長が選ばれて、副会長は立場が異なるがそれでも皆さん協力して運営されている。次は誰かなどの権力闘争をやっている場合ではない。国政選挙で、医師会員一人が10票ずつ集めれば、200万票になる。そうなれば、政府も医師会の力を無視できない。日本医師会で政治担当もやってきたが、その経験も活かしたい。平等で良質な医療を提供するため、医師が充実した医療をする事が可能になるように取り組みたい。多くの先生方に理解を賜りながら先頭に立って、進んでいきたい。

流れるような話ぶりで、話しの展開もシャープで医師会長に選ばれるにふさわしい人物と皆様に印象深いご講演でした。（編集委員会）



川島 龍一（昭和44年卒） 兵庫県医師会会長就任挨拶

兵庫県は広く、僻地も存在する。伯井先生と共に大世帯医師会の会長になっているので、協働して広く考えを発信していきたい。先ほど教授就任で紹介された青井先生が京都大学iPS細胞研究所で研究されているような先端医療もその安全性・平等性を確保した上で社会全体に広げ、個人の医師が考える全人的医療を社会に展開する際の精神的・実務的な拠り所となる事が医師会の役割である。

「医師会と神緑会との連携」について、少し話してみたい。私が卒業した当時は、教授が人事権、学位授与権、財政的な面も含めて権限を持っていた。それを改善する為の青医連運動が活発化し、44、45年卒業の世代は非入局、博士号ボイコットをし、大学病院や市中病院で独自の卒後研修を行った。46年卒が入局したので44・45卒も大学に帰った。ただ、執行部にいた4～5名が入局せず、私の場合、甲南病院外科部長の長谷川先生に拾って頂き、外科研修、研究や論文の書き方も指導していただいた。当時、44青医連の研修受け入れで、神緑会にも頼みに行ったが冷たく断られた。神戸大学が後輩の指導システムをしっかり持っていないと困る。医師の偏在に関しては若い人は地方に行きたがらないが、勤

務定年後のベテラン世代が地方に行くのも解決への一法でないか？神戸大学の卒業生で優秀な人材を確保するためにも中央にしっかりした系列病院を確保するのが大切と考え、西市民病院と神戸大学との連携を模索したが、頓挫した。学閥云々でなく神緑会の役割は大きい。神戸大学がしっかり発展して良い医師を輩出してほしい。医師会とリンクして地域医療を発展させたい。

現在の政治状況では、民主党は基本理念が間違っている。民主党には期待したが、脱官僚になっていない。予算が成立しても関連法案が通らない。自民党への短い期間での回帰も問題があり、医療理念の弱いもの同士の大連立も問題だ。菅第二次改造内閣では、増税と医療への市場経済原理導入を目指す人々のトロイカ体制になった。20%台の支持率しか無い政府では、政権がいきづまる可能性がある。今年、国民皆保険制度が発足して50周年である。皆さんも医師会に結集して戦後の混乱の中、貧困と公害に苦しみながら先達が創設した安全・良質・平等な日本の医療制度を守る為にご協力下さい。

切れ味鋭い語り口で、分析力に優れ説得力のあるご講演でした。
(編集委員会)

新春学術講演

「日本の医療・社会秩序が混乱している理由」

— グローバリズムのもたらす弊害 —

日本金融財政研究所 所長
経済アナリスト

講演者 菊池英博

グローバリズムとはアメリカニズムのことであり、アメリカの政治経済社会の実情やアメリカが進めているあらゆる政策がすべて正しいと信じ込ませることである。この背景にあるのが、ミルトン・フリードマンという元シカゴ大学教授（故人）が提唱した新自由主義（ネオ・リベラリズム）と呼ばれるイデオロギーであり、「小さい政府」「民営化」「規制緩和」「自由化」を主張する。財政政策の面では、「トリクルダウン理論」という理屈を掲げて「富裕者にカネを渡せば経済はよくなり、貧者も幸福になる、人間は自己責任で生活す



司会の大竹邦夫
(昭和44年卒)

の富が富裕層に集中する政策をとった。このため米国では財政赤字が拡大し、1985年には米国は債務国に転落してしまっただけである。

べきであり、社会保障は必要ない」「自由化・規制緩和の観点から、麻薬の使用は自由化すべきである」「儲かると思えば何をやってもよい」と主張する。まさに社会秩序維持を否定し、倫理観は皆無といってよい。

ところが、英国で1979年に就任したサッチャー首相がこうした新自由主義の理念を政策に取り入れ、政府の医療支出を大幅に削減した結果、病院は次々に破綻し、医師は海外に移住してしまい、国民皆保険制度が崩壊してしまった。さらに経済活動面でも生産性の低下が見られ、教育費も大幅に削減された。

米国では、1981年に就任したレーガン大統領がこの政策を取り入れて経済政策を全面的に転向し、法人税と所得税の最高税率を大幅に下げ（法人税では46%から34%、所得税では70%から28%）、社会



感動的な講演の菊池英博先生



学術講演会風景

レーガン大統領に協力して新自由主義を日本に持ち込んだのが中曽根康弘首相（1982-87年）であり、1983年からの医療費・医師育成費の圧縮を開始した。さらに1994年から米国は日本に「対日年次要望書」を送り、司法・立法・行政面で多くの「カイカク」を迫り、小泉構造改革はまさにその具体化であった。日本の医療に関しては、「混合診療の自由化」と「政府の医療費支出の削減」を要求し、この要望を受けて成立したのが「医療改革法」（2006年6月）であり、毎年、政府が3000億円の医療支出を圧縮する方針が明記された（政権交代で廃止）。

医療という最も崇高な分野が外国から儲けの対象として弄ばれることは厳に回避すべきである。「医療は人間が豊かな社会を築く上で最も重要な施設であり、国民共通の社会的資本としてしっかりと維持すべきである（宇沢弘文・東大名誉教授）」。日本は270兆円の体外純債権を持つ世界の「カネ持ち国」であり、この国民の預貯金を日本のために使用してデフレを解消し経済を成長させれば、消費税増税なしで医療に回す財源はいくらでも出てくる。

神緑会の先生方には、社会の指導者としてのご活躍を期待したい。

大竹 邦夫（昭和44年卒）

菊池 英博先生

略 歴

1959年 東大教養学部卒
1963年4月-1964年3月 大蔵省出向
旧東京銀行（現三菱東京UFJ銀行）を経て、
1988年8月-1991年5月までシドニー日本商工会議所副会頭
1995年 文教学院大学教授
2007年4月 日本金融財政研究所長（シンクタンク）、
経済アナリスト

著 書

銀行ビッグバン—21世紀・日本の銀行像（東洋経済新聞社、1997年）

銀行の破綻と競争の経済学—B I S規制からの脱却（東洋経済新聞社、1999年）
増税が日本を破壊する—本当は「財政危機でない」これだけの理由（ダイヤモンド社、2005年）
消費税は0%にできる—負担を減らして社会保障を充実させる経済学（ダイヤモンド社、2009年）

その他

世界一の医療を守るには
—「混合診療自由化」は国民皆保険を破壊する大きな罠—
財政危機はウソ、日本国民の預貯金をわれわれのために使おう— など
森田塾東京教室における講義録他



講演後、菊池英博先生と歓談する
大竹 邦夫

菊池英博先生のご講演の感想 一目から鱗一

大竹 邦夫 (昭和44年卒)

「国民の生活が第一」という公約で歴史的な政権交代を果たした民主党であったが、菅直人政権になり、公約がなし崩し的に反故にされつつある現状、そして庶民には大増税、輸出企業には大減税を提唱してきた与謝野馨を経済政策の中心的閣僚に招き入れ、消費税大増税と企業税大減税に向うことを宣言している。

そして、それを大手新聞やテレビが華々しく応援している。

この時期に、日本一のエコノミストと評価されている菊池英博先生に、講演をして頂いたことは、最高のタイミングであった。

神緑会メンバーのほとんどが、現在の日本は医療崩壊の危機にあると感じています。それが、小泉竹中『カイカク』による、大幅な社会保障費削減にあることを大部分の方は感じていますが、マスコミのたれ流す「財政危機」の巧妙なプロパガンダによって、「借金を子孫に残してはならない」、「社会保障費の増大が財政危機の原因だ」などと信じ込まされ、板挟み的な悲しみを感じてきました。

ある人は、医療費削減をある程度は受入れ、またある人は医療費を守るために消費税増税に賛成した

りしています。

しかし、それらの「常識」は、財務官僚による悪質なプロパガンダであることが、菊池先生の講演でよく分かりました。

財政再建論者がステレオタイプに語ることは、国の財政を家計にたとえられることです。収入の範囲でしか使ってはならないのは当然であるという、あまりにも分かりやすい幼稚な理屈で、国家財政を語り、我々の多くもかなりだまされてきています。

熱が上がったら、何でもかんでも解熱剤で下げなきゃいけない、なんていう幼稚な理屈を信じるプロとしての医者はいません。

インフルエンザに解熱剤使用して脳炎、髄膜炎などが増大していることは、ほとんどの医者のコンセンサスになりつつあります。

しかしこれが経済になると、からっきし幼稚な理屈を信じてしまうのは仕方がないことかも知れませんが、我々がエビデンスに基づく医療を目指しているのですから、経済に関してもそうあるべきだと気づくべきでした。

菊池先生は、まさしくエビデンスに基づいた講演をして下さいました。

- ・消費税を上げることは、むしろ財政赤字を悪化させてきたことは歴史が証明しているとして、多くの具体的な歴史的エビデンスを上げておられます。
- ・消費税発足してから、今日まで、消費税による税収のすべてが、法人税減税に使われてきた事実。
- ・日本の財政は借金だけからではなく、資産との対照でみなければならない。そうすれば、財政危機なんてものは全くのウソであることが分かる。
- ・長く続いてきたデフレ不況は、社会保障費の増大なんてもんでは決してなく、すべて政策の失敗の連続による。

- ・むしろ社会保障費や教育費を、国民の生活がゆたかになるように使えば、その結果として税金が増えて、財政赤字はむしろ減ってくることは、歴史的にすでに証明されているエビデンスである。
- ・そして、日本の財政には多くの財源があり、これを今使わなければならない。そうすれば、不況は克服され、経済全体もよくなっていくことは理論的に明らかである。

これらのことは、まさに目から鱗の、素晴らしい感動的な講演でした。

懇親会報告

さしもの長い総会（午後2時開始）と特別講演の最後（6時半）に、恒例の懇親会が隣の会場に移して行われました。宮本副理事長の司会で開会し、理事長、医学部長、附属病院長の挨拶の後、次期医学会会頭に内定し、神戸市医療産業都市構想で御活躍中の先端医療センター理事長の井村 裕夫先生による元教授代表としてのご挨拶と乾杯のご発声で歓談に移りました。神緑会の名簿にも明らかなように、神緑会員には、卒業生の正会員と他大学卒業で神戸大学の教授になっておられる特別会員、その方々の退職後の受け皿としての名誉会員の身分があります。名誉会員には、総会毎にご招待状を送っていましたが、例年のご出席は、1～2名程度でした。今回は、元教授（神緑会員含む）の参加が15名、現職教授が15名の合計30名が出席されました。恩師である先生方の多くの御出席が実現しましたが、来年度の運営については、皆さんのご意見を集約した形で検討したいと思います。8時前に参加の皆さんの満足の中で、宮本副理事長の中締め挨拶で散会しました。



井村 裕夫（名誉会員）の発声による乾杯



井村 裕夫（名誉会員）
挨拶



高井 義美（昭和49年卒）
研究科長・学部長挨拶



杉村 和郎（昭和52年卒）
附属病院長



ご出席いただいた元教授
藤田 拓男（名誉会員）



ご出席いただいた元教授
望月 真人（昭和32年卒）

iPS細胞研究基金のご紹介

2009年4月1日に創設し、年間目標額5億円だが、今年度の寄付金額は「目標額に遠く及ばない金額」との事でした。毎年度報告書を作成し、ホームページに掲載予定との事です。

実は、平成22年2月に神緑会が行った山中伸弥京都大学教授のラスカー賞受賞記念講演会の後、神緑会会員を対象に寄付の支援活動を予定していました。ただ、一方で2010年12月に神戸大学基金の寄付依頼を送付しましたが、この日程は約束済みでもあり、躊躇しました。ただ、2010年12月29日の日本経済新聞の山中先生の取材記事で、「iPS細胞の研究で日本は米国に1勝10敗の状態が続いている。予算、研究者数、研究論文数のいずれも米国の10分の1程度だ。この状況は今後も変わらないだろう」と話されていました。改めて現在の寄付状況を確認すると、2010年度は、約一億円が集まっているが研究員を一名確保すると10年で無くなる金額です。更に、未だに存在する文部科学省の用途の厳格な規定など、日本の研究環境が克服すべき課題がまだまだ多いことに行き着きます。同時に、寄付、慈善事業などが一般慣習化していない日本において、最近の全国に拡がったタイガーマスクの主人公「伊達直人」達のランドセルの寄付運動のように日本社会への医療分野での挑戦かも知れません。神緑会が60周年記念行事として3年間にかけて行った活動では、500万円の高額寄付が会員個人で行われました。その一方で、全体の寄付活動は低調と言わざるを得ませんでした。山中先生には、研究内容のすばらしさもさることながら（近いうちにノーベル賞に届くでしょう）、日本の寄付行為や研究環境にも風穴を開けていただきたいと期待します。

中村朱美広報室長は、「主任研究者も充実し、新研究棟も完成（神緑会ニュースレター第2巻1号12ページ掲載）し、iPS細胞技術の基礎研究から臨床研究に向けて、研究活動を活発に推進する体制が整いました。iPS細胞技術を一日も早く医療応用に結びつけ、患者さんに届けるためには、前臨床研究やiPS細胞バンクの設置などを早急に進める必要がありますので、今後も支援いただきますようお願いいたします」と述べておられました。

C i R A Center for iPS Cell Research and Application) サイラ
京都大学 i P S 細胞研究センター内のホームページアドレス (<http://www.cira.kyoto-u.ac.jp/j/index.html>)
サイラ 検索でホームページに入ると i P S 細胞研究基金の項目で
→『お申し込みはこちら』から基金への申し込みができます。

尚、今後、神緑会での支援のあり方については、理事会・評議員会でも検討しますが、とりあえず一年遅れですがこの機会に参考までにお知らせします。

活躍している先輩シリーズ²

編集委員会では、平成21年度からのニュースレターの発行に際し、会員の皆さんに興味を持ってもらうための内容を検討し、「活躍している先輩シリーズ」を企画しました。その1号として、62年卒業の京都大学山中伸弥教授を取り上げ、ニュースレター第1巻第2号として平成21年6月1日に発行しました。ところが、シリーズの2の対象者を模索する中で、山中先生があまりにも活躍されたためこの企画が続かなくなりました。一年近くくすぶる中で、シリーズとは別に神緑会活動の活性化の一貫として永年の神緑会の懸案事項に取り組む事にしました。羊土社「医育機関名簿」を基本に、全国で活躍されている神戸大学卒業者の教授と准教授を北から順にまとめました。今回の資料1に相当します(P23～P27参照)。その目的の一部には、20数年前に神緑会が企画した活動がありました。神緑会委員の中で、現在ほど多くの教授等が選ばれていない時期でしたが、当時の神緑会の基本活動の本拠地のオリエンタルホテル(震災で全壊後に昨年再建)にお集まり戴き、四角く囲ったテーブルの周囲にお集まり戴いた諸先生に自由な立場で、「神緑会活動への要望」や「神戸大学への要望」をご発言いただきました。2年間で終了となりましたが、どうしても神戸大学への批判も多く、費用のかかる事から中止と判断されたように思います。

それとは別に、全国でご活躍の諸先生方をリスト化し、地域別にお集まり戴き意見交換等をする予定でした。ただ、旅費等の費用の問題があります。20年前では人数も少なかったと思いますが、何カ所に分けて開催するにしても旅費が発生し、その費用負担は当分の期間、現在の神緑会の会費の集まり程度では新しい事業は難しいものでした。そこで、今回作成したリストを元に、各先生方に寄稿をお願いし、集まった原稿をシリーズ的に発行することで、会員諸氏の興味を喚起することにしました。依頼の段階では、大学を取り巻く環境が厳しく、研究大学とそれ以外の大学との差別化が起ころうとしているので研究大学として生き残るための激励となるような寄稿を依頼しましたが、一方で神戸大学での教育や研究が現在にいかに関立しているかとか、今後の発展のために神戸大学に望むことや新たなシステムのご提案などをお書き戴く事にしました。その点では、それぞれの先生方の視点は多様ですが、これから研究や診療でのキャリアアップを志す若い人達に有意義だと考えております。あるいは、やや中だるみ感をお持ちの方にも役立つと期待しています。当面、既に多くの原稿が集まっており一度に発表する事は出来ませんが、8月発行の神緑会学術誌にも分けて掲載する予定です。その意味では、未提出の方々から改めて提出したい等の原稿も受け付けたいと思います。なお、一覧表は、あくまでも羊土社、2010-11医育機関名簿によります。大学院卒が神戸大学でない方や個人情報に関連で空欄の方もあり、正確な情報把握は難しい面があります。お申し出により修正をしながら正確なものにしていく予定です。神緑会員の発意高揚に寄与する事を期待しています。地域ごとの討論会などの企画も有意義と思いますのでご意見をお寄せ下さい。

◆お詫び◆

既に27名の先生方から原稿をいただきましたが、今回は紙面の関係で7名の先生方の原稿しか掲載できませんでした。今後は、卒業と入学をテーマとした第3巻第1号(4月中に発行予定)、6月25日開催の総会関係資料を含めた第3巻第2号と8月発行予定の神緑会学術誌に掲載します。

原稿を集める段階で公表に向けた準備が不十分だった事をお詫びします。



神戸大学医学部に期待すること

東北大学加齢医学研究所・腫瘍循環研究分野 教授
佐藤 靖史 (昭和53年卒)

私は昭和53年の神戸大学医学部卒業です。内科研修医として1年間神戸大学附属病院で研修した後、当時の第3内科（藤田拓男教授）に入局、2年間の外勤ののち大学院に進学しましたが、一身上の都合により同退学、昭和57年に郷里の大分医科大学（現在の大分大学医学部）の第1内科に移籍し、その後平成6年12月に基礎研究者として現在のポストに就いて16年が経過しました。神戸大学医学部を卒業した後は、研修医の1年と大学院生の1年の合計2年間しか神戸大学医学部とは関わっておりませんので、内部の事情についてはほとんど分かりませんが、外部から眺めて、折りに付け感じていることや、今後神戸大学医学部に期待することについて述べてみたいと思います。

一般に、地方大学は人材に限りはありますが、どの程度積極的な人事を行うかによってその大学の活動は大きく変わり得ることに気がきます。ひとりの熊本大学では、若手の人材を外部から新任教授として積極的に迎え、その人達が頑張って業績を伸ばし、中央の大学に教授として戻るといった流れが形成されたことで大学が活性化したことは良く知られています。そして、一度そのような流れが認知されると、外部から優秀な人材がどんどん集まって来るようになります。一方、大学が民族主義に陥って、自分の大学の出身者ばかりで人事を固めてしまうと、外部の優秀な人材からは敬遠されて、業績の伸びはslow downし、大学は負のスパイラルに陥ってしまいます。では、神戸大学医学部はどうでしょうか？外から眺めていると、以前には少し沈滞しているように感じられる時期もあり心配していましたが、最近では、特に高井義美医学部長のもとで積極的な人事が展開され、研究の活動性は大きく増しているように見受けられます。この流れが継続されてpositive feedbackが形成されると、神戸大学の活動性は一層広く外部からも認知されるようになるものと期待しているところです。なお、人事に関しては、現在私が所属している東北大学も門戸解放主義を標榜していますが、経験的には内と外の比率が概ね7：3の割合、3を外からの血として注入するの

が健全なように思っています。

研究大学として生き残る上で次に大切なことは、如何にして他大学にない特色を打ち出して行くかということでしょう。全ての研究領域で満遍なく人材を揃えることは到底できない訳ですから、この領域であれば国際的に通用する、国内では何処にも引けを足らない、というようなコアとなるべき研究領域を、基礎と臨床のそれぞれで持つことが強く望まれます。「細胞内シグナル伝達研究」は神戸大学医学部のコアとして分かり易く、すでに十分に認知されているところですが、臨床のコアについては未だ確立していないように見受けられます。研究大学に於いて顔となるべき臨床領域は、やはり内科系だと思います。是非とも神戸大学医学部の臨床の顔となるような、特に内科系の研究領域が確立されることを、強く期待しているところです。

それからもう一つ、これまでに神戸大学の活動性が実感されたのはどんな時だったかなと考えたとき、神戸大学の卒業生が、母校を離れて、海外や国内の他の研究施設で活躍しているのに出会ったときのことが思い出されます。甘えの許されない状況で頭と腕を磨いて、幅広い人間関係を形成しながらエスタブリッシュして行くことは、決して容易なことではありませんが、そう努力することで得られることは大変大きいものです。神戸大学医学部の皆さんは、小さくまとまらずに、海外や国内の他の研究施設と交流する機会を積極的に作り、是非そのような場所で臨床や研究に従事してみてください。そして、そこに居着くもよし、神戸大学に戻るもよし。学外に居着く者は神戸大学のネットワークを大きく広げるし、戻る者は獲得した知識を持ち帰って後輩に引き継いで行くことで神戸大学は活性化されることでしょう。

21世紀は、残念ながらバラ色な時代ではなくて、先の見通せない不確実な時代となり、生き残りをかけた大学間の競争も熾烈を極めていきます。どうか神戸大学がこの競争に勝ち残って行かれますように、心よりお祈り致します。



基礎研究に進むシステムの充実を

群馬大学大学院医学系研究科脳神経病態制御学講座・神経生理学分野 教授
群馬大学生体調節研究所附属生体情報ゲノムリソースセンター センター長

平井 宏 和 (平成元年卒)

大学院修了後、途中1年間を除く15年間、国内外の大学・研究所に勤務しておりました。この間、神戸から飛び出した同窓の先輩・後輩の目覚ましい活躍を見て、いつも神戸大医学部出身者はきわめて優秀であると感じています。ではどうして神戸大学医学部の卒業生は優秀なのでしょう？もともと旧帝大医学部に入るレベルの優秀な学生が入学している以外に、いくつかの原因が上げられます。

1. 基礎研究のスターの存在

私が学部生のときには西塚先生を筆頭に、田中千賀子先生、高井先生など、素晴らしい業績を上げている教授がいらっしや、学生の目が研究に向いていました。世界トップレベルの研究の話をわくわくしながら聞き、卒業後は自分もそんな研究ができるんだと思っていました。

2. 研究設備・研究費が貧弱であったこと

今はかなり改善されたと思いますが、私が大学院生のときは研究室は狭く、一部の研究室を除いて機器は貧弱で研究費も少ししかありませんでした。研究室には、教授がゴミ捨て場から拾ってきたものがたくさんありました。高価な機器や部品は買えないので、近くのホームセンターで材料を買ってきて作ったり、教室にあるがらくたのような器具を組み合わせて作ったりしました。その後、私はドイツ、アメリカ、国内では理研、金沢大、群馬大と異動しました。理研は別格として、金沢大や群馬大でも十分機器がそろっていて、研究室は広く、大学院生のときと比べると夢のようでした。旧帝大ならなおさらでしょう。しかし、よい研究機器を使っているからといって成果が上がるわけではありません。自分の目的に応じて機器を使いこなす必要がありますが、逆に機械に使われているような人がたくさんいます。大学院時代にならぬを使って工夫し、自分で研究を作っていく経験がその後の研究に大きく役立っていると思います。

3. 神戸大学医学部の知名度が低いこと

関東では「神戸大学は私学ですか？」と言われることがあります。また、歴史的な経緯もあり、医

学界における地位は決して高いとは言えません。関西ではかなり違いますが、東京では神戸大学医学部は地方の一医大に見られることもあり、最初のころは少なからずショックを受けました。神戸大学医学部卒業でデメリットはありませんが、メリットもありません。悔しいけれどがんばって実力で評価してもらえないのです。そういう状況で、旧帝大医学部出身者とポテンシャルが同じであれば、プライドなく頑張る神戸大医学部出身者が勝つのは当然のことです。

神戸大学が研究科大学として生き残っていくために以上のような神戸大学の状況を考えると、研究科大学としての生き残りは容易ではありません。では、神戸大学医学部はどうすればよいのでしょうか。私の提案は、「基礎研究に進む卒業生を増やすシステムをいっそう充実させる」です。他機関で研究をして行く上で、神戸大学卒であることにメリットはないと書きましたが、医学部卒には大きなメリットがあります。昨今、東大でも阪大でもMDが基礎にほとんど進まなくなりました。基礎の教室ではMDがほとんどおらず、私の教室でも日本人のMDは、ついに今年から私だけになりました。教授選考で本当はMDを採りたいのだけれども、候補がないためにPhDを採用するということところが少しずつ増えて来ました。この状況下で優秀なMDは金の卵です。もちろん臨床も大事ですが、他大学の臨床科の教授選では同窓会が強かったり、旧帝大卒が強かったりで、教授ポジションをとって行くのは容易ではありません。しかし基礎では、卒業生を基礎に進ませることさえできれば、神戸大学が一人勝ちできる可能性が十分にあります。東大が強いのは、東大自身が強いということもありますが、卒業生が多くの医科大学の教授になっており、研究、研究費獲得、教授選、学会設立、学会開催など様々な場面で協力できるということもきわめて大きな要因と思います。神戸大学が研究科大学として生き残るための1つの条件は、他大学に多くの教授を出すことで、そのためには卒業生を基礎に進ませることが近道です。

ではどうすれば、卒業生を基礎に進ませることができるのでしょうか？これには、どうしてMDが基礎に進まなくなったのかということを考える必要があります。大きな要因はやはり新臨床研修制度でしょう。初期臨床研修で一度大学を離れるともう大学には帰って来なくなりました。すでに検討されているのかもしれませんが、神戸大学卒業→基礎系大学院→臨床研修、という制度はどうでしょうか。基礎研究はやってみて初めて面白みがわかります。私を含め、多くの基礎のMD教員は大学院で基礎研究をやってみておもしろくなり、そのまま居残った方々だと思います。今は、基礎研究をやる前に外に出て行きますので、研修後に基礎に帰ってくる可能性はほぼ0です。初期研修後、臨床科に戻ってから基礎の大学院では、基礎研究者として大成するには手遅れかもしれません。

ただ、神戸大学卒業→基礎系大学院→臨床研修というコースを作るだけではあまり効果はなく、このコースに進むことが魅力に感じる多くの方策が必要でしょう。たとえば大学院の学費を無料にし、学位取得後にもし基礎に残るのであれば、すぐに助教（任期付きでも可）になれる、などのメリットが必要だと思います。また学位取得後、やはり臨床に戻って臨床研修を行うにしても、特定助教あるいは神戸大のレベルの高い関連病院の医長からスタートできるなど、このコースを選ぶ人はエリートだと皆が思うような工夫が必要でしょう。このようなシステムは、基礎だけでなく大学にきっちりと

した研究技術を習得した人が残るという点で、臨床科にも大きなメリットがあると考えます。また、大学入学当初から学生に基礎研究のおもしろさを、あらゆる機会を利用して多くの教員が伝え、大阪・京都・東京のブランド病院で研修することだけがステータスであるといった間違った考えに染まらないようにしていく努力を続けることも重要であると思います。

以上、まだまだ荒削りな考えではありますが、少しでも母校の生き残りに役立てば幸甚に存じます。

1981年（昭和56年）卒の佐谷でございます。卒後脳神経外科研修医、大学院生として6年間母校で勉強させて頂きましたが、その後米国に7年、熊本大学に13年、そして現在の慶應大学に4年間滞在したため、お世話になった母校には何もお返しをすることができず、大変申し訳なく感じております。それにも関わらず、機会あるごとに医学部学生講義や大学院講義や神緑会総会などでお話しする機会をお与えくださり、常に母校を意識しながら過去25年を過ごすことが出来ましたことは、同窓の皆様の寛大なお心によるものであると、心から感謝いたしております。また私が現在のように、基礎医学に身を置きながら、臨床の先生方とも深く交流し研究を進めていくことが出来るのも、大学・大学院時代を通して基礎から臨床まで隔たりのない極めて良質の教育を母校で与えていただいたお陰であることは間違いありません。この紙面をお借りいたしまして、心から御礼申し上げる次第です。



大学の内申書

慶應義塾大学医学部先端医科学研究所 遺伝子制御研究部門 教授

佐谷 秀行（昭和56年卒）

この度、お世話になった母校に期待することというテーマで一言述べさせていただく機会をお与えくださいましたこと心から御礼申し上げます。外に身を置く私から見ると、正直「神戸は頑張ってるなあ」という印象があります。たとえばCOEという制度を例にいたしますと、熊本大学、慶應大学においてその申請準備に関わった者としては、これら大学の教育と研究基盤を支える資金を獲得することがいかに難しいかということ、身を持って体験しており、それを常に獲得してこられた母校に深く敬

意を表するものであります。各大学の持つ長所と地域性を考慮しながらアイデンティティーをいかに引き出して、それをアピールするかという教職員が一体となった申請時の努力は勿論のこと、それらをアピールするためには人事や組織改変や国内外機関との連携という基盤的な部分を普段から意識して構築しておく必要があります。一朝一夕に創り上げることの出来る代物ではありません。言い換えれば、そこにこそ、COEの意義と難しさがあると感じます。

COEは単なる競争資金としての意味よりも、大学がいかにか教育や研究のためのシステム作りに普段から努力を払っているかを自他共に認識する意味で極めて重要なイベントであったと私自身は考えています。各大学の基盤経費が削減され、教育・研究の屋台骨が揺らぐ事体を招いていることは由々しきことであり、早急に是正すべき問題であることは事実ですが、一方こうした大学の「内申書」が評価されるシステムが現れたことは極めて意義があったと私は考えています（それ故、グローバルCOEが仕分けの対象となったことには違和感を覚えざるを得ません）。

つまりCOEのような一次的な資金獲得を目標にするというわけではなく、大学は常にその「内申書」をいかに優れたものにしていくかということ、教職員に限らず構成する全ての人間が意識しておくべきであると私は考えています。では、現在及び未来の社会情勢を鑑みて、これからの大学は「内申書」を良くする為に、どのような努力を行うべきなのでしょう？もちろんこんな難解な疑問に対してすぐに回答はなく、常に慶應大学の皆さんと議論させていただいておりますが、私自身は重要なキーワードとして「ネットワークづくり」を上げたいと考えています。月並みな言葉ではありますが、私達日本人が最も不得意としているものの一

であると考えます。大学内の各教室、組織の連携はもとより、国内の他大学、研究機関、医療機関、海外の大学や施設の強みを把握し、弱さの補強や強さの相乗的増強を図ることが重要であり、そのネットワークの中から優れた人事交流や教育研究基盤の重厚化が生まれてくると考えます。

慶應大学医学部は昨年、全米最大のがんセンターであるテキサス大学MDアンダーソンがんセンター（MDA）と姉妹提携を締結し、大学生から教職員に至るまでアクティブな人事交流を開始すると同時に、アジアのMDA姉妹提携施設同士でconsortiumを構成する事により、法規さえ整えば臨床試験などを共同で実施できる体制を構築しています。また、つい最近、静岡県と包括協定を締結し、自治体と大学という全く異質の組織同士でお互いの強みを供給しあうという新しい形の連携を開始しています。

神戸大学医学部も、これまで通り実力と魅力を湛えた大学作りに邁進しておられることと思います。ニュースレターなどを見せていただくたびに、嬉しく感じると共に、参考にさせていただいております。これからも斬新な組織作りを展開され、私達他の大学で働く者をドキドキさせて下さいますことを心から楽しみに致しております。



「同窓生からの研究科大学としての神戸大学医学部への期待」

名古屋大学大学院医学系研究科 病態外科学講座 心臓外科学 教授
上 田 裕 一（昭和51年卒）

私は1970年入学、76年卒業のM9、上田 裕一です。医学部在籍中の思い出から振り返ってみて「私の医師としての人生の転機に繋がったなあ」と感じた出会、言葉を紹介し、神戸大学医学部の伝統、気風が継承されることに期待を込めて、責を果たしたいと思います。

まず第1には、教養部2年での西塚泰美教授（神戸大学元学長）の講義でした。当時は教養部封鎖の影響も残っていた状態で、教養過程に医学部の講義導入が始まったばかりの段階であったと思います。今も鮮明に西塚先生の話が記憶に残っています。「六甲台から見える神戸港、こんなに見事に港を俯瞰できるチャンパスは、神戸大学の他にはイス

タンブル大学くらいだ。君たちの大半は、港から出航する船のように世界に飛び出す時代になる。世界各地で活躍するもよし、神戸大学に帰港するもよし」というような内容でした。もちろん私は、西塚泰美教授のご業績は全く知る由もない医学生2年生で、医師になることさえ十分に自覚できていない時でしたから、こんな夢の様なことを冒頭の講義で話された先生には驚きました。「世界に飛び出す志を持って！神戸大学医学部はこのような校風だ」というような趣旨を、先生は表情豊かに、関西弁でお話しになり、生きた言葉として私の記憶に留まったのです。つまり、世界的にも高名な西塚教授が講義で医学部の魅力を伝えられたこのearly exposure

が、私に大きなインパクトを与えたと言うことです。おそらく、近年では入学後の早い時期に、病院内のshadowingなどの導入で、臨床現場にもearly exposureが進んでいると思いますが、重要なことは病院での実習の内容よりも、教員とのface-to-faceの繋がりをどのように初対面で形成できるかに掛かっていると考えています。

次は、私の専門科の決定に繋がった出会いです。講義では、第2外科中村和夫助教授の心臓外科、特に先天性心疾患の講義は実に明解で、毎回、大変魅力的な内容でした。また、麻田 栄教授が臨床講義で、丁度、留学から戻られたばかりの木村 健先生と山口真弘先生のお二方を紹介され、お二人は米国およびカナダでの臨床留学の経験を鮮やかに話されました。この海外での臨床経験のお話しのインパクトは、西塚先生の「世界に飛び出す志を持って！」に全く通ずるものでした。なお、1975年は大血管転位症（TGA）に対する動脈スイッチ手術、Jatene手術が論文発表された年ですが、ポリクリで山口真弘先生から聞いたTGAの話から、私は心臓外科を将来専攻する意志を固めた気がします。ただ、専門外科医になる前には医師としての素養を身につけることが欠かせないと感じて、母校には在籍せず、奈良県の天理よろづ相談所病院のレジデント1期生に応募し、採用されました。今日の初期臨床必修化の実例ともなったレジデント研修を受けたことは、「世界に飛び出せ」への一歩に繋がり、後の1985年には、National Heart Hospital, Londonに心臓外科の臨床留学が叶いました。

もう一つ、私の人格形成に多大な影響を及ぼしたのは医学部ラグビー部在籍とキャプテンを務めたことです。ラグビー部では、チームを構成することや先輩、後輩との人間関係について体得させていただきました。体育会系とも評される気風ではありますが、神戸大学医学部ラグビー部は古い体質ではなく、先輩との繋がりもグラウンド外ではまったく自由なものでした。「西医体で優勝する」を使命に、当時は医学部ラグビー部のレベルをはるかに越える練習をして、1974年には西医体優勝を達成しました（なお、在学中には準優勝2回、3位1回の実績）。ラグビー部の先輩、同僚、後輩との一体感

は、卒後30年を経った今も連綿と続いています。メンバーは各地で活躍、教授も多く排出しています。なお、ラグビー部の西医体優勝は、私たちの優勝から25年振りに達成（連続優勝）しており、近年の後輩の活躍にOB会も盛会となりました。冒頭の話については、ラグビー部OBの山中伸弥京大教授が、西塚先生のように新入生に熱く語りかけていることを知り、素晴らしいことと喜んでいました。

さて、私は1999年から名古屋大学大学院医学系研究科教授として、大学卒業後初めて、大学教員として勤務しました。大学での教育、研究、診療というミッションもさることながら、外科系講座としては、「いかに手術成績を上げるか、手術待機期間を短くするか」には、大学病院の大きな壁に遭遇しました。国立大学法人化により自助努力も可能になって、名古屋大学医学部附属病院では手術件数は増加しましたが、欧米とは言わず、近隣のアジア諸国と比べても、大学病院での外科治療体系には驚くべき格差が生じてしまいました。人口の多い神戸大学医学部附属病院でも、類似の問題があることと察します。研究科大学の外科系講座においては、「臨床実績無くして研究はあり得ない」と確信しています。自施設の臨床実績からの課題を究明する、さらに臨床への応用、導入が求められているのです。したがって、豊富な臨床実績を蓄積できる大学附属病院の診療システムに大胆に組織改変をしなければ、研究科大学としての神戸大学医学部、とくに、臨床系講座の将来展望は開けてこないと思います。加えて、大学医学部の基盤として最も重要なことは、医学部学生や大学院生の教育、専門医修練においては、教員が自らの経験と考え方を生きた言葉で語りかけることでしょう。今や、チュートリアルを導入により、講義は極めて少なり、あまりにも医療倫理に希薄な医師、研究者養成になりつつあることを危惧しています。私はポリクリ学生との数回の短時間の話ではありますが、ここに記した出会いの観点から、彼らが将来において、私の言葉から、夢を、高い志を持ってくれるように語ることを心がけています。

同窓生として母校、神戸大学医学部のますますの発展を祈念して筆を置きます。



母校への思い

京都大学iPS細胞研究所長

山中伸弥(昭和62年卒)

私は昭和62年に神戸大学を卒業後、すぐに大阪市立大学整形外科に入局し、その後は縁あって大阪市立大学、カリフォルニア大学、奈良先端科学技術大学院大学、そして京都大学において基礎研究を行って参りました。すなわち、母校では臨床、研究とも全く経験しておりません。それだけに母校に対する思いはかえって強いものがあります。留学中、奈良先端大や京大への異動の時、また京大に移った後も、神緑会の先生方に多くのお力添えを頂きました。

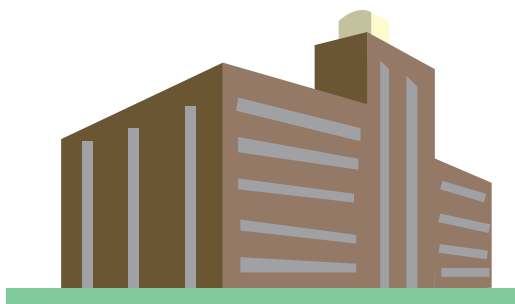
整形外科の研修終了後、大阪市立大学医学部の薬理学で学位を習得し、その後カリフォルニア大学サンフランシスコ校(UCSF)、グラッドストーン研究所に留学いたしました。UCSFはノーベル賞受賞者が何人も在籍する全米屈指の医学部であり、留学当初は自分がついて行けるのだろうかと不安になったことを覚えています。しかし同時期に菊地章先生(昭和57年卒、大阪大学医学部教授)が留学されておられ、その活躍ぶりに神戸大学の後輩として大変に勇気づけられました。また高井義美先生(昭和49年卒)がUCSFに講演に来られ、その圧倒的なデータのすばらしさに会場から感嘆の声が出ました。そのときも神戸大学出身であることを誇りに思い、その後の留学生活の糧となりました。

3年半の留学を終え帰国後は、日米の研究環境の差に悩み、研究をあきらめかけたこともありましたが、そんなときに奈良先端科学技術大学院大学の助教授公募の広告をみかけ、これがだめだったらきっぱり研究をやめようと応募しました。縁もゆかりもない訳ですので書類選考にも残らないと考えて

いましたが、自分でも驚いたことに採用され1999年12月に着任しました。貝淵弘三先生(昭和55年卒、名古屋大学医学部教授)が看板教授として活躍されており、いろいろな面で助けて頂きました。また米澤一仁先生(昭和56年卒、故人)には、神戸大学の優秀な学生さんを派遣してもらい、CREST研究のメンバーにも加えて頂きました。

2004年には京都大学再生医科学研究所に採用され、翌年に研究室を奈良から京都へ移しました。京都大学には千葉勉先生(昭和49年卒)が消化器内科教授としてご活躍されており、教室には神戸大出身者、特に自分も所属していたラグビー部OBが複数在籍しておられます。私にとって千葉内科は京大の中のオアシスのような存在です。千葉門下生の青井貴之先生(平成10年卒)が、iPS細胞研究所規制科学部門の教授として、再生医療の実現へ向けて日々奮闘してくれています。また、研究内容の近い佐谷秀行先生(昭和56年卒 慶応大学医学部教授)は、常に私の目標であり、共同研究でも助けて頂いております。神緑会理事長である前田盛先生(昭和46年卒)には、ラグビー部の後輩であることを良いことに甘えっぱなしで、大変にお世話になっております。

このように卒業してすぐに母校を離れたにもかかわらず、神緑会の多くの先生方に支えて頂いたおかげで研究を続けることができました。神戸大学医学部が、日本全国に優秀な研究者を輩出している証でもあると思います。私自身も、母校神戸大学医学部と神緑会に何らかのかたちで貢献できるよう、今後も研究と教育に全力をつくして参ります。





神戸大学の将来のための提言

近畿大学医学部第2生理教授
松尾 理 (昭和42年卒)

私達は神戸医科大学の最後の卒業生として昭和42年に卒業しました。私達のクラスから15名以上の同級生が大学教授になりました。1学年でどうしてこんなに多数の教授を輩出することになったのでしょうか。私達の学生時代には基礎配属というのが3ヶ月間ありました。そこで基礎研究者の生活を体験でき、真実を明らかにすることがどういう意味なのか実感する機会でした。

今全国全ての大学で、教員数が大きく減少しています。それは研修制度の必修化により、多くの医学生が卒業後大学に残らないで、市中病院で初期研修を始めるからです。その結果大学におけるマンパワーが非常に不足している現状があります。その中で神戸大学が生き残るためにはどうすべきか。これがこの提言の一番骨子です。

大学が色々な意味で非常に危機的な状況にあるのは、全国共通です。それでは神戸大学でどのような施策をすれば生き延びていけるのでしょうか。それは大学が学生にとって魅力的な存在であり、そしてまたそこに働いている教員が学生にとって生きたロールモデルであるべきなのです。そうならば、学生はあの教員のようにになりたい、あの病棟・外来で臨床業務をしてみたい、あの研究室で研究をしてみたいという欲求が出てきて、市中病院という選択肢が減る筈です。これを実現するために、まず1) 制度としての部分と、2) 教員各自が考えるべき部分との2つを提言します。

1) 制度としては、まず大学の有給スタッフ数を現在の倍になるほど増員するのです。そうすると人件費が高く、大変だという意見もあろうが、入れ物の容量を大きくしておけば沢山入ります。すなわち、大学に残りたいという人間をスタッフとして抱え込むのです。俗にいう「囲い込み運動」を早くやって、大学がマンパワーとして十分な戦力を備えている状況にするのです。

大学は診療のみならず研究や教育においても、世界の先端を走らねばなりません。その時大学が教員の欠員のため充分機能しない、という事態になれ

ば、それは大学の存在自体が社会から否定されることとなります。すでに地方の旧国立大学ではそういう事例が見られ始めています。そうならないために、制度としてスタッフの数を倍増するという大胆な事を提言します。

もう一つのポイントは、2) 教員のことです。教員一人ひとりが十分な指導力を持って学生あるいは若手医師に対して指導・教育するということにします。学生や初期研修の研修医と上手に接触することによって、若き医学生、研修医は将来あのような先生になりたい、あの先生とあのような研究をしてみたい、あの先生とあのような手術をしてみたいという欲求が出てきて、大学に残るようになります。すなわち人生の生きた見本となって、若き医学生や研修医から見れば将来の師と仰げる人材に、教員がなって欲しいのです。自分の後に続け、というような雰囲気生きざまに出ていると、自然とそこに人が集まってきます。これが大学のマンパワーを充足させる一番大きなモチベーションになります。そうやって若い人が集まった時に、ポジションが無いから駄目だと言うのは情けないことなのです。ですので最初に述べた定員を倍増するようなこととセットにしておけば、集まってきた人達をスタッフとして待遇でき、彼等はそこで経済的に安定して仕事をすることができます。経済的な安定は今の世の中では普通のことなので、まずその保証をしてやると大学の持っている3つの使命を特徴づけることが可能になります。そのことを上手にやれば、結果として大学が社会に認められることとなります。

学生時代および大学院（神戸大学大学院医学研究科）時代を振り返ってみて、一つ欠けていると思う体験は知財教育です。この事に関して一度も教育を受けませんでした。研究した結果をすぐ論文や学会で発表することが研究者の使命と思っていました。まして企業と一緒にするという事に関しては冷ややかな目で見られていた時代でありました。もし私が知財教育をしっかり受けておれば、例えば私ど

もが開発したt-P Aの特許についても最後まで権利を持ち続けていたと考えます。このt-P Aの特許料は年間10億円にもなりましたから、余裕を持ってその後の研究生活ができた筈です。

しかし知財教育に関して全く無知でしたし、研究室での研究段階は動物実験までで終わってしまうので、特許譲渡書にサインをすると言う体験を何度もしました。アメリカのある研究室に行った時に壁に書いてあるポスターを見て驚きました。「論文を書く前に特許を書け」と書いてありました。そのポスターを見てなるほどと思った次第です。そういう意味で知財教育というものは大きな力を与えるものですから、これは大学院だけでなしに学生時代にも一度は教育しておくべきだと実感しております。

大学が色々な意味で生き残っていくには、特色が



「研究科大学としての神戸大学医学部への期待」

姫路循環器病センター 院長

梶 谷 定 志 (昭和52年卒)

私自身、いいかげんな人間なので説教じみたことをいう資格はありませんが、少しばかり、神戸大学医学部の、これから目指すべき形を考えてみました。

数年前に厚生労働省が導入した新臨床研修医制度は、地方の医学部を卒業した若い医師を大都市圏有名病院へ誘導する結果に繋がりました。そのため、医師の極端な偏在が生じ、過疎地での地域医療崩壊や救急医療崩壊が露見し、大きな社会問題となりました。私が勤務する姫路循環器病センターでも、内科医や麻酔医の退職が相次ぎ、診療体制の一部が維持できなくなっています。神戸市に設置されている神戸大学医学部でさえ、新臨床研修医制度による負の影響をうけています。多くの本学卒業生が、大学病院や関連病院での研修を選択せず、東京や大阪へ転出しているのが現実です。将来、彼らが神戸に戻ってくる可能性も低いといわざるをえません。若い医師が神戸大学医学部を卒業した後、他の地域へ離散していく現象にはいくつかの理由があるはずですが、いろいろな理由が考えられますが、結局、「神戸大学医学部および関連施設での臨床研修や研究生活に魅力がない」が結論になります。神

無ければなりません。教育・診療・研究の3つのどこで特色を出すかによって、大学の在り方が変わってきましょう。研究が神戸大学の特徴とするならば、研究で世界的な特徴を発信できる環境を作らねばなりません。研究は一朝一夕に大きな成果が出るものではありませんが、世界をリードする環境整備は大学が準備しておくことだと思います。これからの難しい時代に生き残っていくためには、世界の最先端を目指して多くの研究プロジェクトを走らせる、それを実現するためには教員の定員数を倍増する、そしてその人件費確保のために大学病院のマネジメントをプロに任し、教員は診療では医師でなければならないことだけに特化した仕事をする、という効率化を考えた運営をして、研究で世界的な競争に勝ち残って頂きたい。

神戸大学医学部を、若い医師が離散する大学でなく、逆に、全国から多数の若手医師が集まってくる活力のある大学にする必要があります。早急に、魅力ある神戸大学医学部を構築する具体的な対策を立てなければなりません。

魅力ある大学とは、魅力ある場所や建物ではなく、魅力ある医師・研究者の存在です。魅力ある臨床医や研究者となるのは「個人」の志と努力のたまものです。各「個人」が魅力ある医師・研究者になれば、結果的に、神戸大学を魅力ある大学にすることが可能です。医学部を卒業した後の進路は、「臨床医」と「研究者」に大別されます。一般市中病院で「研究者」の選択枝はありませんが、大学にはどちらの選択枝もあります。さらに、大学には本来の機能である「教育者」としての任務もあり、この選択枝の多様性が大学の最大の特徴となっています。「臨床医」「研究者」「教育者」すべての分野で魅力ある人材を育て、その存在を学外へ発信することができれば、魅力ある大学になるはずですが、しかし、学外の間人である我々から見た神戸大学の現実、すべての分野で魅力ある人材がゴロゴロいるというものとはかけ離れています。神戸大

学に限ったことではありませんが、そもそも、スーパースターでない平均的能力の医師が、優れた「臨床医」かつ「研究者」かつ「教育者」になるのは不可能です。優れた「臨床医」とは標準的な医療を確実に実践する医師に他なりません。患者の利益となる標準的な医療をするために、学び、実習し、研鑽に努めるのがその本分です。社会も臨床医にそれを求めています。一般的でない突飛な医療を進んで求める患者さんはいません。一方、すぐれた「研究者」は創造性が必須の条件となります。新しい発見をするために、必死で努力しなければなりません。現在の医学部大学人の多くは、本質的に全く異なる「臨床医」と「研究者」の両者たることを求められており、それを兼任しているのが実情です。彼らが、日々、本来の仕事だけでなく膨大な量の雑用に追われて、心身ともに疲弊しているのは想像に難くありません。また、多忙であるのを理由に、自らが魅力ある「臨床医」と「研究者」になれないことを正当化しているようにも見受けられます。現状に甘んじ、それを許容するようになれば、大学はむしろ居心地がいい場所です。世間の目から見ると、大学はステータスの高い存在です。教授や教官が世間の尊敬の対象であるのは、昔も今も変わりません。しかし、ステータスの上に胡坐をかき、長期間、大学に安住している人材が、魅力ある大学を築くことができるわけがありません。いつまで経っても、優れた「臨床医」と「研究者」を育成することでも

きません。多くの大学人にとって「臨床医」と「研究者」の双方を求められるのは、重荷であり、結果的に中途半端な人材になっているのが現状です。神戸大学は、まず「臨床医」と「研究者」の区別を明確にし、それぞれの分野で優れた人材を養成する必要があります。優れた「臨床医」を養成するためには、大学単独では不十分です。むしろ、質の高い関連病院を中心とした、優れた「臨床医」養成プログラムをつくるべきです。常に、大学と関連病院との間の密接な連携と人事の交流を途絶えさせないようにしなければなりません。一方、優秀な「研究者」の養成も不可欠です。臨床の片手間に研究をしても、質の高い研究ができるはずがありません。医学部卒業直後から大学院で研究に没頭できる環境づくりが望まれます。

私の好きな言葉に、"noblesse oblige"「高貴なるものの義務」という言葉があります。語源はフランスですが、イギリスでもその精神は受け継がれ、第一次世界大戦において、ケンブリッジの学生が最も高い戦死率を記録したといわれています。私は、神戸大学医学部の教員に、この精神を持ってほしいと期待します。拝金主義にならず、自らの仕事に誇りを持ち、そして、付随している社会的な義務に対する強い責任感と行動を期待します。学んだことが品性として現れている教官が多数存在すれば、神戸大学医学部は自ずと魅力的な大学になるでしょう。



資料1 他大学で活躍している神緑会会員（教授・准教授等）一覧表（神戸大学を除く）

大学名	所属	役職	氏名	卒業年度	専門分野
札幌医科大学	外科学第二	教授	樋上哲哉	昭57	心臓血管外科、胸部外科、人工臓器、臓器移植再生医療、医療工学
旭川医科大学医学部 医学科	消化器病態外科	教授	古川博之	昭55	移植外科、消化器外科
秋田大学医学部医学科	保健管理センター	所長	苗村育郎	昭52	
岩手医科大学 医学部医学科	産科婦人科	准教授	竹内 聡	昭61	婦人科腫瘍学、癌化学療法、婦人科病理学、子宮肉腫の治療
東北大学大学院医学 研究科・医学部	機能医科学 (高次機能障害学)	教授	森 悦朗	昭52	高次機能障害
東北大学加齢医学研 究所	腫瘍循環研究分野	教授	佐藤靖史	昭53	血管生物学、血管新生の分子機構
群馬大学大学院医学 系研究科・医学部	神経生理学	教授	平井宏和	平 1	神経生理学、神経可塑性の分子機構 解明、及び神経変性疾患の遺伝子治 療法開発
群馬大学生体調節研 究所 展開センター	代謝シグナル 解析分野	教授	北村忠弘	平 1	糖尿病の発症メカニズム解明
自治医科大学	外科学 (小児外科学部門)	教授	前田貢作	昭54	小児・新生児外科学、 小児呼吸器外科学
獨協医科大学	生理学（生体情報）	准教授	森 正弘	昭61	神経生理学、 中枢神経回路特性・シナプス伝達
獨協医科大学	病理学（人体分子）	教授	藤盛孝博	昭49	外科病理学、分子病理学
獨協医科大学 PETセンター		教授	坂本 攝	平 4	ポジトロン断片撮影法、 放射線診断額
獨協医科大学病院	医療情報センター	教授	中村哲也	昭57	消化管の内視鏡診断と治療、レーザー 内視鏡、カプセル内視鏡、医療情報
獨協医科大学 越谷病院	小児科	教授	永井敏郎	昭49	遺伝学、染色体異常症・奇形症候群 の診断と自然歴研究、神経筋疾患、 先天性代謝異常症、性分化
獨協医科大学 越谷病院	泌尿器科	教授	岡田 弘	昭55	アンドロロジー、尿路性器悪性腫瘍、 排尿機能
埼玉医科大学	麻酔科	教授	松本延幸	昭49	麻酔と肝循環・エネルギー代謝、疼 痛治療、東洋医学
埼玉医科大学 総合医療センター	皮膚科	教授	伊崎誠一	昭52	皮膚の蛋白分解酵素、凝固・線溶、 炎症学、肉芽腫、細胞間基質、薬疹
埼玉医科大学総合医 療センター	麻酔科	教授	宮尾秀樹	昭52	術中輸液管理、高頻度陽圧換気法、 人工呼吸中の加温加湿
埼玉医科大学 国際医療センター	病理診断科	教授	清水道生	昭56	診断病理、細胞診、膵・消化管病理、 皮膚病理
東京医療保健大学	医療栄養学科	教授	高柳和江	昭45	医療の質の研究
日本医科大学	内科学（血液・消化 器・内分泌代謝部門）	教授	坂本長逸	昭49	消化器病学、消化器内分泌学、消化 性潰瘍発症及び修復機序、膵臓病学
東京大学大学院医学 系研究科・医学部	免疫学	准教授	本田賢也	平 6	粘膜免疫システムに関する研究
東京大学大学院 理学系研究科	生物学	教授	黒田真也	平 3	シグナル伝達経路のコンピュータシ ミュレーション
東京医科歯科大学大 学院医歯学総合研 究科・医学部（医学科）	先端医療開発学系 遺伝子・分子医学分 子内分泌内科学	教授	平田結喜緒	昭45	内分泌代謝、高血圧、糖尿病、心 血管ホルモン、下垂体副腎系、内皮機 能障害

大学名	所属	役職	氏名	卒業年度	専門分野
慶応義塾大学医学部附属先端医学研究所	遺伝子	教授	佐谷秀行	昭56	細胞周期制御分子、がん幹細胞の性状解析、がん細胞浸潤・転移機構解析
東京慈恵会医科大学	脳神経外科学	教授	大井静雄	昭48	脳腫瘍、小児脳神経外科学、水頭症、二分脊椎、実験奇形学、頭蓋顔面外科、神経内視鏡手術、手術機器の開発、脳ドック
昭和大学医学部	眼科学	客員教授	山中昭夫	昭32	眼内レンズ、バイオマテリアルの眼科応用、網膜硝子体手術
東邦大学医療センター大森病院	糖尿病・代謝・内分泌センター	教授	芳野原	昭46	糖尿病、リポ蛋白代謝、肥満
横浜市立大学大学院医学研究科・医学部	生命病態法科学（法医学）	教授	藤原敏	昭51	法医病理学、法医中毒学、法医頭部外傷（特に脳損傷）、交通外傷
東海大学医学部	基盤診療学系	准教授	矢部みはる	昭53	臨床検査学、小児科学、小児血液、造血細胞移植
信州大学大学院医学系研究科・医学部・医学部附属病院	分子薬理学（薬理学）	教授	山田充彦	昭59	心・血管系のイオンチャネルの分子薬理・生理学
金沢大学医薬保健研究域医学系	環境社会医学（環境生体分子応答学）	教授	西條清史	昭56	環境変化に対応する生理機能の分子生物学的解析
福井大学医学部	器官制御医学 産科婦人科学	教授	小辻文和	昭46	生殖内分泌学、婦人科手術学
岐阜大学大学院医学系研究科・医学部	医科学専攻 神経統御学 生理学	教授	森田啓之	昭56	循環生理、環境生理
名古屋大学大学院医学系研究科・医学部	病態内科学（糖尿病・内分泌内科学）	教授	大磯ユタカ	昭49	内分泌代謝学（神経内分泌、水電解質代謝など）
名古屋大学大学院医学系研究科・医学部	病態外科学 （心臓外科学）	教授	上田裕一	昭51	心臓外科全般、胸部大動脈外科
名古屋大学医学部附属病院	医療経営管理部	准教授	吉田茂	昭62	医療情報システム構築
名古屋大学大学院医学系研究科附属神経疾患・腫瘍分子医学研究センター	発生・再生医学部門 （神経情報薬理学）	教授	貝淵弘三	昭55	細胞内情報伝達、神経回路形成
三重大学大学院医学系研究科	ゲノム再生医学講座 神経再生医学・細胞情報学	教授	溝口明	昭55	神経再生と機能再建、シナプスの形成と可塑性の分子機序
三重大学大学院医学系研究科	病態修復医学講座 消化管・小児外科学	教授	楠正人	昭55	消化器外科、炎症性腸疾患、大腸癌集学的治療
滋賀医科大学分子神経科学研究センター	神経細胞動態分野	客員教授	齋藤尚亮	昭55	神経情報伝達機構、神経薬理学
同志社女子大学・薬学部	医療薬学科 薬物治療学	教授	高橋玲	昭55	癌化の分子生物学的及び細胞遺伝学的解析
京都大学大学院医学研究科・医学部	内科学 （消化器内科学）	教授	千葉勉	昭49	消化管細胞の分化と癌化、消化管細胞のシグナル伝達
京都大学大学院医学研究科・医学部	内視鏡部	講師	仲瀬裕志	平2	炎症性腸疾患の臨床的、基礎的解析
京都大学大学院医学研究科・医学部	消化器内科	准教授	渡部則彦	平2	免疫性消化器疾患の研究
京都大学大学院医学研究科・医学部	臨床研修センター	講師	伊藤俊之	平3	卒後臨床研修のあり方

大学名	所属	役職	氏名	卒業年度	専門分野
京都大学 iPS細胞研究所	再生統御学 (再生誘導研究)	所長 教授	山中伸弥	昭62	幹細胞生物学、発生工学
京都大学 iPS細胞研究所	規制科学部門	教授	青井貴之	平10	iPS細胞の臨床応用 移植医療の安全性の構築
京都府立医科大学 大学院医学研究科・医学部 医学部	分子病態病理学	准教授	伊東恭子	昭57	神経病理学、分子神経発生学、神経 変性疾患の分子病態
大阪医科大学	放射線医学	教授	猪俣泰典	昭55	放射線腫瘍学、放射線障害、密封小 線源治療、特に乳癌、前立腺癌の放 射線治療
大阪医科大学	総合医学 リハビリ テーション医学	教授	佐浦隆一	昭61	リウマチ性疾患のリハ、運動器疾患 の病態生理
大阪大学大学院医学 系研究科・医学部	外科学 (心臓血管外科学)	准教授	倉谷 徹	昭61	大動脈外科、ステントグラフト、 Endovascular aortic repair
大阪大学大学院医学 系研究科・医学部	生化学・分子生物学	教授	菊池 章	昭57	可溶性因子を接着による細胞応答の 制御
近畿大学医学部	解剖学	教授	重吉康史	昭63	時間生物学、神経科学
近畿大学医学部	生理学第二	教授	松尾 理	昭42	細胞生理学、再生制御機構、分子生 物学、病態生理学、止血制御機構
近畿大学医学部	薬理学	教授	東野英明	昭45	内分泌学、高血圧症、生薬に関する 研究
近畿大学医学部	精神神経学	教授	白川 治	昭55	気分障害の診断と治療臨床、精神薬 理学
近畿大学医学部	外科学(肝胆膵部門)	教授	竹山宜典	昭56	肝胆膵外科疾患の病態と治療、外科 侵襲学
近畿大学医学部	心臓血管外科学	准教授	北山仁士	昭57	新生児・乳児開心術、心筋保護
近畿大学医学部	救急診療部(E R部)	准教授	橋本直樹	昭50	食道発癌の臨床と実験、胆道発癌の 臨床と実験
近畿大学医学部	病理学	教授	伊藤彰彦	昭63	病態解析の実験病理学、癌の浸潤・ 転移
近畿大学医学部	放射線医学 (放射線診断学部門)	教授	村上卓道	昭61	腹部画像診断学、インターベンショ ナル・ラジオロジー
近畿大学臨床心理セ ンター		教授	人見一彦	昭40	心理療法、精神病理学、統合失調症 の治療
和歌山県立医科大学	小児科学	教授	吉川徳茂	昭50	小児腎臓病学
和歌山県立医科大学	泌尿器科学	教授	原 勲	昭60	泌尿器癌、泌尿器科、腹腔鏡手術
和歌山県立医科大学 先端医学研究所	分子医学研究部	教授	坂口和成	大院 昭59	細胞内シグナル伝達機構の解析、幹 細胞生物学、骨カルシウム代謝学、 再生医学
兵庫医科大学	腫瘍センター	客員教授	坪田紀明	昭40	呼吸器外科、肺癌縮小手術、気管気 管支形成術、中皮腫
兵庫医科大学	生理学 (生体情報部門)	教授	西崎知之	昭56	学習・記憶に関連するシナプス可塑 性の分子機構解明
兵庫医科大学	内科学(冠疾患科)	教授	大柳光正	昭49	循環器、虚血性心疾患、微小循環
兵庫医科大学	内科学(冠疾患科)	准教授	佐古田剛	大院 昭62	循環器系疾患に対する遺伝子、再生、 細胞移植治療、心不全におけるシグ ナル伝達機構
兵庫医科大学	放射線医学	教授	廣田省三	昭53	腹部画像診断、血管造影、カテーテ ルによる治療(I V R)

大学名	所属	役 職	氏 名	卒業年度	専門分野
兵庫医科大学	放射線医学	教 授	上紺屋憲彦	昭56	放射線治療、小線源放射線治療、直腸癌放射線治療、全身照射
兵庫医科大学	内科学(循環器内科)	准教授	辻野 健	昭59	高血圧、動脈硬化、心不全、時間循環器科学、サイトカインと循環器疾患
兵庫医科大学	整形外科	教 授	吉矢晋一	昭54	膝関節外科、スポーツ医学領域の基礎及び臨床研究
兵庫医科大学	地域医療学	特任教授	吉永和正	昭50	熱傷、中毒、蘇生、災害医療、医学教育
兵庫医科大学	救急・災害医学	主任教授	小谷穰治	大院平9	浸襲下の免疫応答、重症病態における代謝栄養管理
兵庫医科大学	医療情報学	教 授	宮本正喜	昭59	病院情報システム開発研究、画像処理、解析の研究
兵庫医科大学	疼痛制御科学	教 授	村川和重	昭49	ペインクリニック、神経ブロックと自律神経
兵庫医科大学	放射線	客員教授	中尾宣夫	昭40	
兵庫医科大学先端医学研究所	細胞・遺伝子治療部門	研究所教授	後藤章暢	大院平4	遺伝子・細胞医療、先端医療学、産学官連携医療
兵庫医科大学篠山病院	地域総合医療学	准教授	和泉良平	昭49	ペインクリニックの診断と治療、神経ブロック療法
兵庫医療大学	薬学部	教 授	斎藤あつ子	昭57	医動物
兵庫医療大学	薬学部	教 授	辻野 健	昭59	循環器内科
姫路独協大学	薬学部分子病態学	教 授	谷口泰三	昭63	認知症モデルマウス
姫路独協大学	医療保険部作業療法学	教 授	酒井良忠	平 8	
川崎医科大学	放射線医学(治療)	教 授	平塚純一	昭56	放射線治療、前立腺癌の小線源治療、熱中性子捕捉療法
川崎医科大学	公衆衛生学	教 授	勝山博信	大院平2	骨代謝における生理活性物質の作用機序の分子生物学的解析
川崎医科大学	産科婦人科学	准教授	中井祐一郎	昭61	胎児診断学、分娩管理、妊娠高血圧症候群
川崎医療短期大学		学 長	今城吉成	昭43	
島根大学医学部	内科学第一	准教授	山口 徹	昭57	内分泌代謝学、カルシウム・骨代謝学
島根大学医学部	内科学第二	教 授	木下芳一	昭55	消化器内科学
島根大学医学部	放射線医学	教 授	北垣 一	昭59	放射線診断学、MRI診断学
広島大学大学院医歯薬学総合研究科・医学部	創生医科学専攻病態探究医科学	教 授	酒井規雄	昭61	神経薬理、神経科学、神経分子生物学
広島大学大学院医歯薬学総合研究科・医学部	放射線ゲノム医科学	教 授	菊池 章	昭57	細胞内シグナル伝達機構による細胞応答の制御とその異常による病態の解析
広島大学原爆放射線医科学研究所	腫瘍外科研究分野	教 授	岡田守人	平 7	呼吸器外科、乳腺外科、食道外科、肺癌、中皮腫
山口大学大学院医学系研究科	保健学系地域・老年看護学	教 授	野垣 宏	昭58	神経内科学、老年医学、リハビリテーション医学
徳島大学大学院ヘルスパイオサイエンス研究部・医学部	病態情報医学(腎臓内科学)	教 授	土井俊夫	昭52	腎臓病学、糖尿病性腎症、臨床検査一般、血液浄化療法

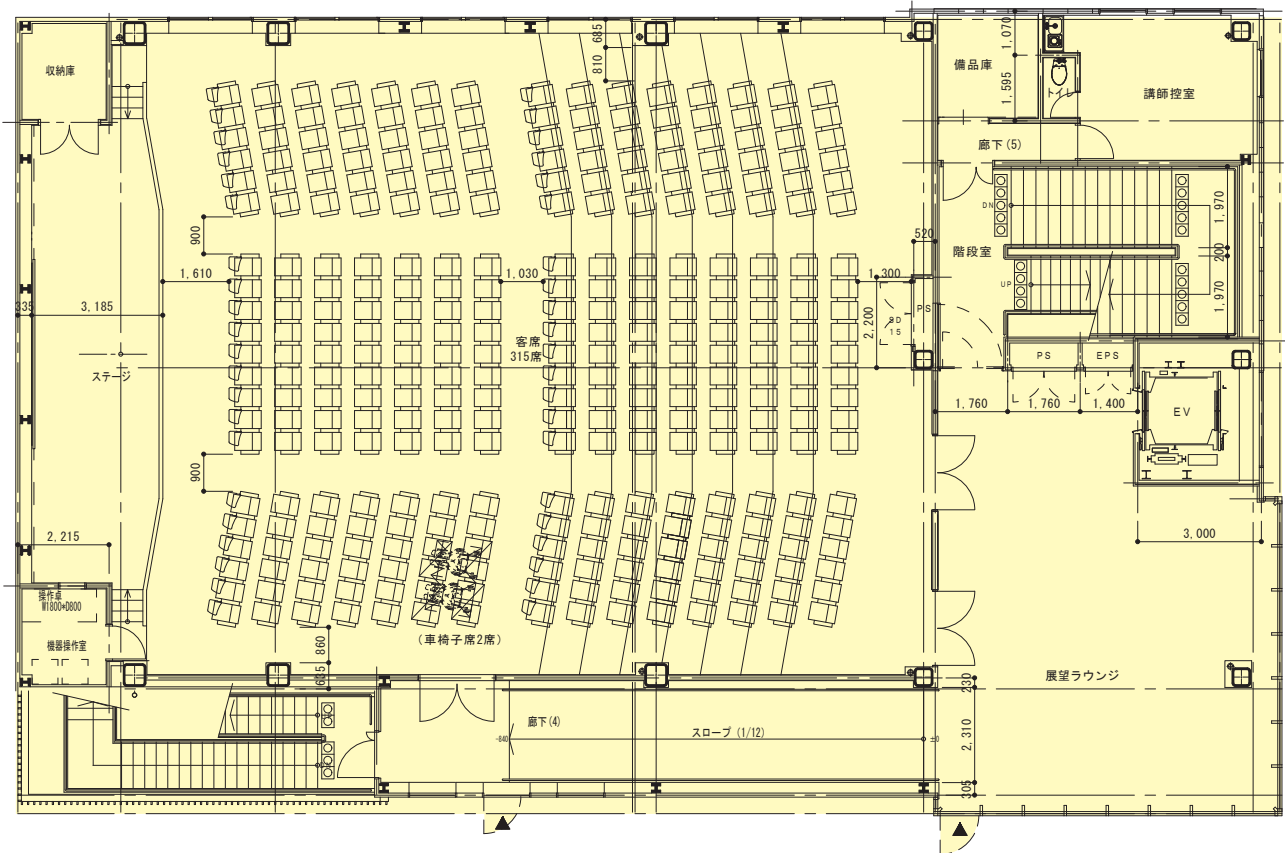
大学名	所属	役職	氏名	卒業年度	専門分野
徳島大学大学院ヘルスバイオサイエンス研究部・医学部	生体制御学	教授	佐々木卓也	昭60	小胞輸送と細胞骨格の制御における細胞内シグナル伝達機構
愛媛大学大学院医学系研究科医学専攻	分子病理学	教授	北澤荘平	昭60	病理診断学、遺伝子発現調節、エピジェネティクス
愛媛大学大学院医学系研究科医学専攻	公衆衛生・健康医学	教授	谷川 武	昭61	公衆衛生学（地域医療学、産業医学）における免疫学及び行動医学的研究、睡眠予防医学
高知大学医学部	放射線医学	教授	小川恭弘	昭52	腫瘍放射線医学、腫瘍放射線免疫学、乳癌の乳房温存療法、局所進行癌の増感放射線療法
香川大学医学部	細胞制御医学（寄附講座）	客員教授	山内清明	昭55	乳腺内分泌外科、外科的免疫学
香川大学医学部	消化器外科学	教授	鈴木康之	昭58	肝胆膵外科、膵癌・胆道癌治療、膵移植
香川大学医学部	整形外科	教授	山本哲司	昭58	骨軟部腫瘍の病態と治療、患肢再建術
熊本大学大学院医学薬学研究部	細胞情報薬理学	教授	中西宏之	昭57	細胞内情報伝達機構
大分大学医学部医学科	寄附講座 人工関節学	准教授	近藤 誠	昭55	関節外科、人工関節を用いた関節再建及び人工関節のインプラント開発
鹿児島大学大学院医歯学総合研究科	社会・行動学 精神機能病学	教授	佐野 輝	昭56	精神神経科学、神経化学、分子精神医学
鹿児島大学大学院医歯学総合研究科	健康科学専攻 社会・行動学 行動医学	教授	乾 明夫	昭53	心身医学、消化器代謝病学
鹿児島大学大学院医歯学総合研究科	発生発達生物学 分子病態生化学	教授	岸田昭世	平 1	生化学、シグナル伝達分子生物学
琉球大学大学院医学研究科感染制御医学専攻	分子感染制御学	教授	荻谷研一	昭56	情報伝達の分子生物学、モデル生物（線虫）での分子遺伝学的解析

学内の動き

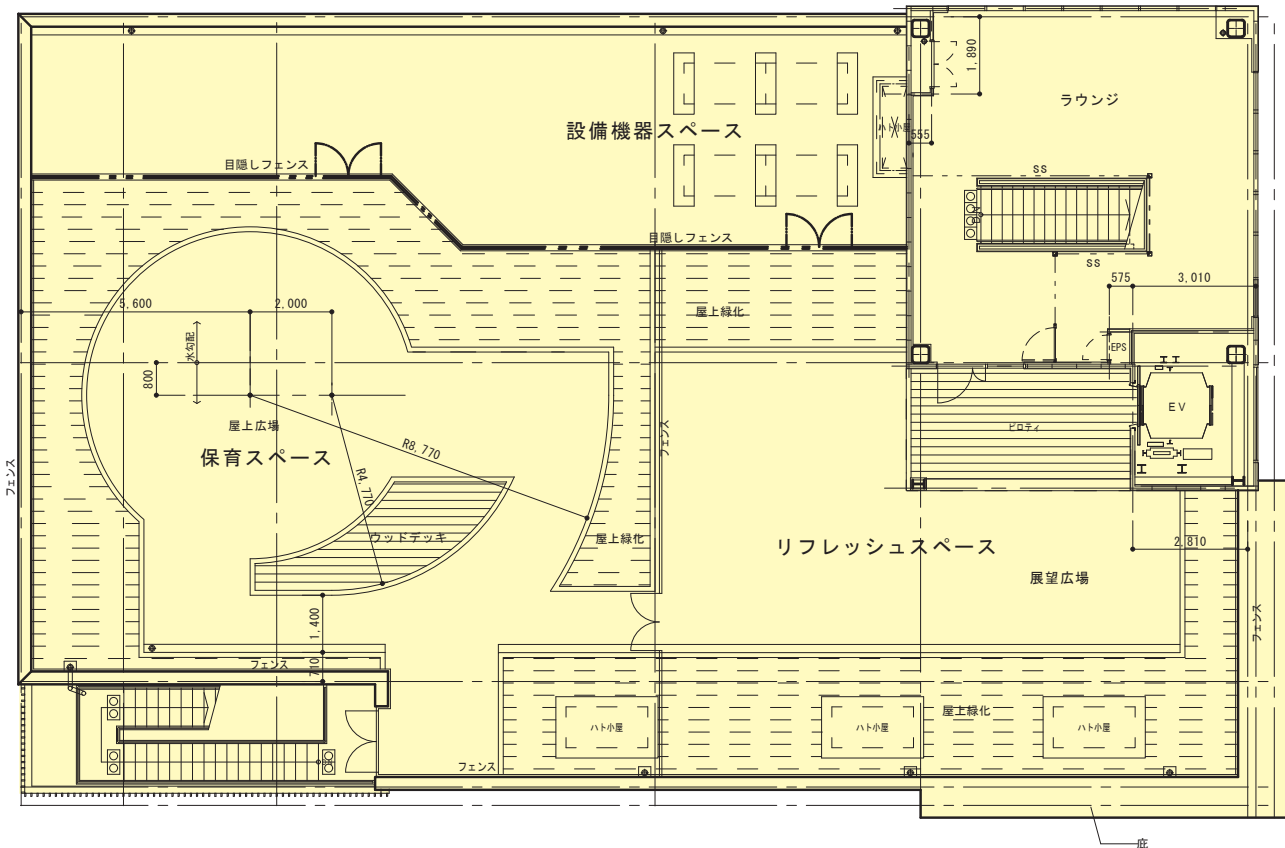
念願の保育所の完成間近！

基礎棟の東側、共同研究館横に「はとぼっほ園」として親しまれた保育所がやっと附属病院入り口に新設されることになりました。起源を遡れば、旧図書館の横で木造平屋建ての「旧・・・病棟」の跡地に職員組合などの活動により設立・自主運営の後、基礎教授会の反対にもかかわらず、プレハブの建物でほんの数年間のこととして、現在の地に建設されました。昭和と平成の改元の前後ですから・・・。病院玄関に面して門衛室のあった場所の横に設置が決まってからも、埋蔵文化財の発掘調査で貴重な埋蔵物が発掘され、神戸市の埋蔵文化財保存委員会の記録を残すだけでなく、現地の保存が義務付けられました。本ニュースレターでも、約1年前に掲載直前まで進みましたが、発行前日に急遽取りやめにもなりました。1～2階が保育所で、その内部構造はセキュリティの関係で極秘とかで3階の大ホールと屋上のみを公開となりました。ホールは、保育所を経由せずに入場が可能で、300名以上の席が確保され、医学科最大の220名収容の外来棟6階の大講義室を上回る規模となります。現在の建物から雨に濡れずに移動できる導線も確保されます。夏には完成し、秋には使用可能となる予定です。女性のマンパワーを活かす取り組みの一部でしょうね。乞うご期待！

3階平面図 (大ホール)



4階平面図 (保育所屋上)



「地域医療学Ⅰ」を開講しました!

地域社会医学・健康科学講座 地域医療ネットワーク 味木 徹夫 (昭和63年卒)

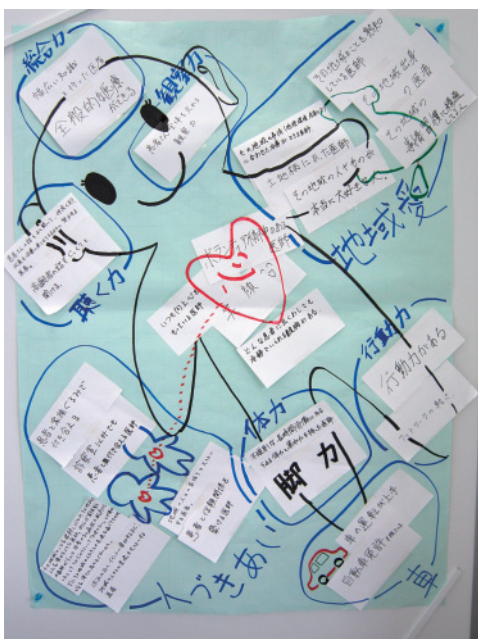
平成21年4月から地域医療を担当する本講座が発足し、現在、総合臨床教育・育成学、地域医療ネットワーク学、プライマリ・ケア医学の3分野で足並みを揃えて人材育成・県の地域医療研究に取り組んでいます。医学部学生講義としての「地域医療学」は、1～3年では講義、4年はチュートリアル形式で平成22年から授業開始となり、その初陣を切って、1年次の「地域医療学Ⅰ」を平成22年9月22日に開講しました。石田岳史自治医科大学教授の講義「地域医療の過去と現在、そして未来」の後、全員が約10名ごとの小班に分かれ、KJ法を使って地域医療に沿ったテーマで模造紙に島を作り、各班が趣向をこらしてプレゼンテーションを行いました。最優秀班には‘ベストプレゼンテーション賞’が贈られました。1年生がお互いに協力して地域医療を考えた有意義な1日となりました。



講義「地域医療の過去と現在、そして未来」
石田 岳史先生



チュートリアル風景



ベストプレゼンテーション賞となった
発表資料

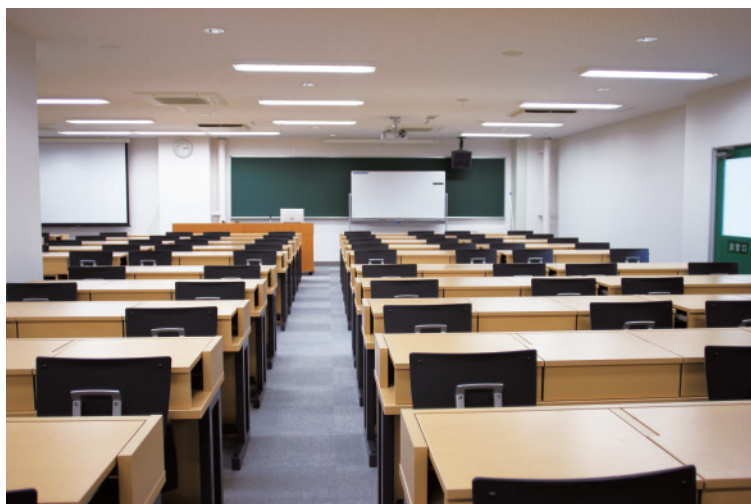


学生によるプレゼンテーション風景

研究B棟(旧基礎北棟)内に学生用講義室が完成

平成22年10月30日のホームカミングデーでお披露目となった第一講堂、チュートリアル室と情報室は、写真からでも十分にお解り頂ける素晴らしさで完成しました。第一講堂は、共同研究館入り口、右の三年生用の講義室として親しまれました。本来は、病理解剖を公開で実施する際の示説室でした。黒板前の机の上を開くと解剖台に早変わりしました。研究B棟1階の教授会用の大講義室（これも、座席数が大幅に増えました）の奥に生まれ変わり、しかも、この画面では解りませんが、それぞれの机には、パソコンが備え付けられ、上に引き出すことができます。2階には、チュートリアル室と情報室が整備されました。共同研究館の耐震改修と動物舎への変更に伴う措置です。共同研究館2階の病理学実習用の5室が、急遽チュートリアル室に改修されて10年目の教育内容の見直しが行われました。同様に、3階の情報室も4年生のCBT用テスト会場として急遽整備されたのですが、約5年間のプレハブ暮らしの後、完璧な学生用教室として生まれ変わりました。こんな恵まれた部屋が整備されれば、泣き言を聞かずに国家試験合格100%が期待出来るでしょう。

なお、研究B棟の地下には、従来動物舎の洗い場として利用されていた広い空間がありましたが、法医学の解剖室が整備されました。同様に研究C棟（基礎南棟）も順に全面改修され、基礎教室となりました。



第一講堂



チュートリアル室



情報室

緊急のお知らせ！

本学卒業生に対して、次のとおり学芸出版（株）から「神戸大学職業別名簿発刊のお知らせ」（往復はがき）が自宅に送られてきていると思われます。

同窓会神緑会は、本件には一切関係ありませんので、対応しないようご注意ください。

なお、神緑会ホームページ(<http://www.shinryokukai.com>)にも注意喚起のお知らせを掲載しております。

神緑会名簿編集委員長 大竹 邦夫（昭和44年卒）

神戸大学・神緑会とは関係ありません



〒230713-1568-0-1

神戸大学

職業別名簿

- ◎発刊予定：平成23年7月
- ◎体裁：B5判（無線綴）
- ◎頒布価格：1冊 11,800円（送料別）（税込12,390円）
- ◎構成
 - 業界別編 ●現住所別編 ●電子メール・メッセージ編

〒534-0011 大阪市都島区高倉町1-3-27 学芸出版（株）
お問い合わせ TEL:06-6924-8373 FAX:06-6924-5558
※電話受付時間は平日10:00～12:00となります。FAXは24時間受付しております。

---(キリトリ線)---

●業界別編 ●現住所別編 ●電子メール・メッセージ編

- ◎氏名のフリガナは必ずお書きください。「丁目2番3号」は「1-2-3」のようにお書きください。
 - ◎この返信ハガキにご記入いただいたものを原稿にします。正確にわかりやすくご記入ください。
 - ◎名簿購入申込みをされた方には、後日振替用紙を発送致します。振替用紙到着時もしくは商品到着後にお支払いください。
 - ◎申込みの取消は発刊予定月の二ヶ月前までをお願い致します。また、名簿発送後の申込取消は出来ませんのでご注意ください。
 - ◎本名簿への掲載は、返信ハガキをご返送頂いた方のみとなります。あらかじめ、ご了承ください。
 - ◎返信ハガキはお申込みの有無に関わらず、ご返送をお願い致します。※この返信ハガキのデータは名簿作成調査にのみ使用し、本データは弊社が所有する貴方様の全データとなります。※ご返送頂いた内容は、本名簿作成のみに使用します。
- （既にご返送の際は失礼をお詫びいたします。）※裏面もお読みください。

郵便往復はがき (往復)

神戸大学

〒230713-1568-0-1

卒業年次			業界分類 <small>(該当する番号を○で囲んで下さい)</small> 01. 農林/水産/畜産 02. 建設/住宅/土木/設計 03. 設備/その他工事 04. 食品 05. 繊維 06. 紙/パルプ 07. 化学/医薬/塗料 08. 石油/石炭/セメント/ゴム/皮革 09. ガラス/窯業/土石 10. 鉄鋼/特殊鋼 11. 金属製品/非鉄金属/電線 12. 産業機械/機械部品 13. 精密/光学機器 14. 家電/家電/通信機/半導体 15. 自動車製造/車両/造船 16. その他製造業 17. 印刷/製本関連 18. 事務機/事務用品関連 19. 福祉/貿易 20. 百貨店/総合月販業 21. 量販店/コンビニエンス/総合小売業 22. 自動車販売/修理 23. 家電/家庭用品/家具販売 24. ファッション/繊維/百貨販売 25. 食品/飲料小売 26. その他小売/卸売 27. 金融関連 28. 証券関連 29. 生保/損保 30. 運輸関連/倉庫 31. 不動産/建物管理 32. マスコミ/通商/出版 33. 広告/調査/情報サービス/シンクタンク 34. コンピュータ関連 35. 観光/娯楽/レジャー 36. 外食/飲食業 37. リース/レンタル 38. その他サービス業 39. 電力/ガス/燃料 40. 医療 41. 宗教/福祉/文化施設 42. 各種団体/協会/専業法人, etc 43. スベジャリスト (法曹関係, 会計, 経営, 労務, 技術士, etc) 44. 官公庁/機関 45. 学校/教育施設/教育サービス 46. 自由業 (報道, 翻訳, 美術, 芸能, 音楽, スポーツ, etc) 47. 在学中 48. その他
フリガナ	姓	名	
氏名	旧姓	旧名	
現住所	〒 ()		
職業欄名称	〒 ()		
出身高校 (旧制学校)	高校/学校		
趣味			
電子メールアドレス	E-Mail: @		
頒布価格 (税込) ¥11,800 (送料別) (税込 ¥12,390)		申込欄 する・しない いづれかに○印をお付け下さい。	

230713 ※氏名のフリガナ(姓)は必ずお書き下さい。 調査カード記入者 本人・他() 続柄 ()

郵便往復はがき(返信)

料金受取人払郵便

淀川支店承認

1248

差出有効期限
平成23年5月
31日まで

<切手不要>

532-8790

(受取人) 淀川支店
私書箱51号

学芸出版(株)
「神戸大学職業別名簿」係

通信欄(メッセージ・コーナーに掲載)
同窓生へのメッセージ、近況、商売上のPRなどご自由にお書きください。

氏名() (年卒)

●業界別編●現住所別編●電子メール・メッセージ編の三部構成!!
神戸大学職業別名簿発刊のお知らせ
【文学部・国文学部・言語学部・経済学部・法学部・経済学部・経営学部・理学部・工学部・農学部・歯学部】

拝啓 皆様におかれましては、お元気で活躍のこととお慶び申し上げます。
ご多忙のところ誠にお手数ながら、この度、神戸大学職業別名簿を発刊するにあたりご協力をお願い申し上げます。 敬具

弊社では、全国各高校・大学の職業別名簿を企画・刊行致しておりますが、この度ご出身の神戸大学をとりあげ、社会の各方面で、どういった卒業生の方々が活躍でいらっしゃるかわかる様「神戸大学職業別名簿」(平成23年7月発刊予定)として発刊致したく準備をすすめております。

人と人のつながりがこの財産である今日、従来に無い本書の出版は、学校・同窓会との関係はありませんが、卒業生の方々の今後のご交流、相互の御発展にまた異業種間交流へとお役に立てていただけるものと思っております。

つきましては、返信用はがきに記載内容をご記入のうえ、10日程でご返送賜りたく、よろしくお願ひ申し上げます。

※頒布対象は同窓生の方々に限らせていただき、予約部数のみ限定販売になります。
※この機会に是非、お申込下さいますようお願い致します。

神戸大学・神緑会とは関係ありません

神戸大学・神緑会とは関係ありません!

編集後記



本号の発行に際しては、1月29日の臨時総会及び新春学術講演会の案内号としてニュースレターの第二巻第三号とするつもりでしたが、総会案内のハガキやチケット販売の作業と重なり、第二巻第三号・四号の合併号としてなんとか発行にこぎつけました。慌ただしい年度末を更に慌ただしくしたような展開でしたので、十分に練られた部分と時間の無いままに無理矢理に押しこんだ部分の混在となりました。それでも、神緑会の広報として懸案事項の紹介や問題提示になるのではと勝手に自画自賛しています。

平成23年4月1日をもって一般社団法人へ移行する予定です。これを機に、全国の医科大学卒業の方で、神緑会活動に賛同する医師の皆様に神緑会への入会を勧める活動を積極的に展開したいと考えております。昨年6月の総会議決で移行の為の総ての条件がクリアーできたと思いましたが、内閣府審査で補正指導があり、臨時総会ではその為の変更内容の審議を行いました。その為、移行後の取り組みが少し遅れました。役員選挙では、3年前の段階から移行を前提に取り組んできたのですが、どこまでも手こずらされた手強い内閣府でした。しかも、今回の移行は何の恩恵も無く、昭和59年の社団法人認可で苦勞された諸先輩の苦勞を無駄にする???側面があるとは情けない話です(多くの財産を貯め込んでいる法人の一掃のためなど)。

活躍している先輩シリーズ2で、「同窓会がこんな事に口を出さない方が良い」とのご指摘もありましたので、「神緑会活動は会員諸氏の利益のために行う」は、掛け声倒れにならないよう、多くの会員に支持され、本当の意図する点が理解されるように期待するものです。

編集委員:

前田 盛	昭和46年卒
久野克也	昭和48年卒
◎山崎峰夫	昭和56年卒
三浦靖史	平成元年卒
吉田 優	平成4年卒
小林和幸	平成9年卒
篠原正和	平成10年卒

◎は編集委員長